共融無盡株式會社

〜利益組入に難あり〜

三重縣下に於ける營業無盡は比較的古くから發達して居り現在六社、いづれも相當の株主配當を續行してゐるのである。昭和七年下期末六社の總契約高は一千六百六十七萬圓で一社當平均二百七十七萬圓になつてゐる。然し未收無盡掛金は總契約高一千六百六十七萬圓に對して百四十一萬八千餘圓であるから其の比率は八分七厘强に當つて居り、全國平均率に較ぶれば三分の高率となつて居るのである。

同社は津市藏町に所在し資本金十萬圓（拂込高二萬五千圓）營業區域は三重縣一圓、設立は大正四年五月である。同社の契約高は同地方の他社に較べて少いが地味な營業方針の下に比較的順調に經過してゐる。同社の契約高、未收高及比率を示せば次の如くである。（單位千圓）

	契約高	未收高	率		契約高	未收高	率
大正十一年下期	六四九	不明	—	大正十二年下期	九〇二	不明	—
大正十四年下期	一、〇二六	七八	〇、〇七六	昭和二年上期	一、二五〇	七五	〇、〇六〇
昭和三年上期	一、四五〇	五二	〇、〇三六	同　四年上期	一、六七五	五二	〇、〇三二
同　五年上期	一、八五〇	六二	〇、〇三四	同　六年上期	一、七七五	七九	〇、〇四五
同　六年下期	一、八〇〇	一〇二	〇、〇五七	同　七年下期	一、八一五	九一	〇、〇五〇

大正十四年下期には契約高早くも百萬圓になつたが、未收無盡掛金も七萬八千圓からになりその比率は七分六厘と云ふ高率を示してゐた。其の後契約高は僅少ながら逐期漸增し、昭和五年上期は最高契約高の百八十五萬圓に達した未收無盡掛金は四年上期には最低の率を示して三分一厘である。其の後と雖も五分內外で同縣下六社平均率八分七厘に比すれば遙かに低率になつてゐる。七年下期の契約組數は七十九組、口數は三千九百五十口、この契約高は百八十一萬五千圓である。當期入金高十七萬七千圓當期給付高十三萬九千圓であるが、當期末の未拂無盡給付金及無盡給付資金は前年同期から見ると幾分減じて居る。未拂無盡給付金五百圓及び無盡給付資金十七萬五千圓に對して現金預ケ金は十二萬二千八百九十一圓、有價證券が一萬三千五百圓といふ金額になつてゐるので資金關係は餘裕綽々たるもの

である。その他の負債勘定の主なる科目を拾つても未拂解約的返戻金一萬八千圓、假受金一萬二千圓、雜負債一萬圓に過ぎない。現金預ケ金として手許資金の保有に努めてゐるので資金關係は圓滑であり且つ充分の餘裕を殘してゐるが、その爲めに貸付金方面への運用は全く削がれてゐる。同社の手元資金は結局給付拒絕に依る滿會給付金であるから相當有利に運用しなくてはならぬ筈である。こうしたことが同社の收支關係を著しく窮窟なものにしてゐるのである。即ち同社の貸付金は一萬八千八百圓に過ぎない。その內譯は拂込金限度貸付九千四百圓、給付金限度貸付八千九百圓である。然し貸付の範圍を限度貸付に限定してゐるのは賢明なやり方である。未收無盡掛金の九萬一千圓は六萬九千圓が未濟口未收、二萬一千圓が濟口未收であるから、未收率を半減することも容易であるが、濟口未收掛金は銷却を怠つてゐる同社の事であるから、その內容は必ずしも良質と言方ふことは出來ぬ。

轉じて損益計算を見るに無盡利益金は當期末契約高百八十一萬五千圓に對し一萬六千四百餘圓を組入れてゐるが、無盡給付資金繰入は六千三百四十四圓に達してゐるので結局差引約一萬圓に過ぎぬ。之れは同社の經營無盡は大阪式無盡であり、從つて給付拒絕を防ぐことが出來ないので無盡利益金の組入には深甚の考慮を拂ふべきであるのにその留意を缺いでゐるからである。貸付金利息の千八百六十四圓は貸付金一萬八千八百餘圓の年二割からになり、非常に高率である。然し同社の資金運用利益といへば貸付利息の千八百餘圓と預ケ金利息の千百餘圓の利益收入丈けであるから無盡給付資金繰入損失六千三百餘圓と對照して同社が如何に不利な經營に甘じてゐるかゞ看取出來る。今少しく考究が遂げられ、收支の均整を計るべきであらうと思惟される。結局當期利益金二千九百五十六圓（內八百五十圓は前期繰越金）を擧げて諸積立金九百五十圓、重役賞與五百圓、株主配當金（年一割）千二百五十圓の處分してゐるが、全然諸銷却を行はずしてこの低金利時の今日この高率の配當は無理である。松田社長の省察を切望して擱筆する。

三重殖產無盡會社

〜〜業績は先づ順調〜〜

同社の所在は三重縣阿山郡上野町にして資本金十萬圓、(內拂込高二萬五千圓)營業區域は阿山郡と名賀郡の二郡の狹少區域に限られてゐる。設立は昭和三年一月にして、昭和二年七月設立の三重無盡より半年遲く設立され、同縣下に於ける最も新しき創業である。

同社は創業後日淺きにも拘らず順調なる發展を遂げて、將來大なる飛躍を爲すべき趨勢すら示してゐるのである。之れ實に同社重役諸氏の倦まざる研究心と不斷の努力の賜にして同社の爲將又斯業界の爲欣快に耐へない。

同社創業後の契約高、未收高及比率の動向を示すに次の如くである(單位千圓)

	契約高	未收高	率		契約高	未收高	率
昭和三年上期	七〇一	—	—	昭和四年上期	一、三五四	一三	〇、〇一〇
同　五年上期	一、六二四	二八	〇、〇一七	同　六年上期	一、八三九	五六	〇、〇三〇
同　六年下期	二、〇六八	六八	〇、〇三三	同　七年下期	二、七二四	去六	〇、〇二八

創業翌年の昭和四年上期には早くも契約高百萬圓を突破すること二十五萬圓、更らに一進又一進の飛躍をつゞけて・昭和六年下期末には二百圓を超過し、翌年同期には七十一萬四千圓となつた。未收高は極めて低額にして比率より見れば四年上期末に於て一厘といふ低率であり、其の後漸增したけれども六年下期が最高率を示して三分三厘であるから先づ低率未收に屬する事勿論である。昭和七年下期末には更に好轉し、契約高二百七十一萬四千圓に對して未收高七萬六千圓、其の率は二分八厘である。

昭和七年下期末に於ける契約組數は二百四十八組、口數が六千五百九十二口であるから比較的短期無盡なることが判る。當期新規契約高は三十九萬九千圓にして當期滿期高はまだ到達してゐないのである。當期入金高は二十四萬六千餘圓にして前年同期よりも五萬四千圓の增加を來してゐるが、當期給付高は十一萬一千圓である。當期入金高が給付高を超過すること十三萬五千圓、從つて現金預金は十九萬六千圓になり、無盡給付資金も著增してゐる。即ち前年

同期は二十五萬九千圓であつたが當期は四十七萬五千圓となり實に二十一萬六千圓の增加である。未拂無盡給付金は前年同期より一萬圓增の一萬六千圓になつたが、現金預ケ金約二十萬圓、有價證券八千七百圓があり、手許資金は極めて豊裕で給付も至つて圓滑である。寧ろ現金勘定は巨額に過ぎ、資金運用上不利益であるまいかと考へられる。貸付金は二十七萬八千圓で、前年同期よりも二十一萬一千圓の增加である。同社は大阪式無盡で從つて給付拒絕は相當あり當期の無盡給付資金の增加が二十萬圓に達したのでそれ丈け貸付金に運用して居るのは寧ろ當然の事である。而も其の貸付增加は其の殆んどが拂込金限度貸に向けられてゐるのは賢明なる措置である。貸付金の內譯は有價證券擔保に三萬九千圓、拂込金限度貸に二十二萬六千圓で他は少額であるから貸付內容は極めてよい。又其の利息收入も當期受入一萬四百圓にして年約七分五厘に廻り好率ではないが決して不利になつてはゐない。勿論右の年利率と云ふのも貸付の時期及條件に依つて相違あるので正しい利率算出は困難である。未收無盡掛金七萬六千圓の內容は給付未濟口四千七千圓、給付濟口二萬八千六百圓、而かも同社は每期眞面目に不良未收掛金の銷却をしてゐるから、回收步合は良好と見られる。

次に損益計算であるが無盡利益關係を見て第一に氣の付くのは無盡利益の銷却の多い事である。即ち無盡利益の二萬五千圓に對して、他方無盡給付資金繰入を一萬七千四百圓計上して居る。之れは同社が大阪式無盡であつて大阪式の通弊に陷つてゐる爲めである。即ち同社の給付拒絕が極めて高率であるのでそれ丈け、未給付口の掛金差損を生じ組入れた豫定の無盡利益金が上らないのである。無盡利益金を犧牲にして巨額の無盡給付資金を留保し、此の運用を貸付に向けてゐるが、貸付は利益收入不安定であるに反し無盡利益は一定の率の下に確定的のものであるから、なるべく給付拒絕を排して、未拂勘定を少くする方が賢明なる策である。此の點に特に同社重役諸氏の留意を換起しておきたい。貸付利息一萬四百餘圓の收益は有力な利益項目を

なしてゐるのであるが、巨額の無盡利益金を棒にして運用した、二十七萬八千圓の貸付に對する利息であるから好利殖と云ふ程ではない。他に預ケ金利息三千二百八十五圓、雜益三千七百十三圓が計上されて居る。

損失勘定に於ては無盡給付資金繰入の一萬七千四百圓と雜損失八千八百圓が首位を占め、收支のバランスに可なり大きな暗影を投じてゐる。

當期利益金五千四百十四圓（內一千百九十二圓前期繰越金）を處分するに、法定準備金に五百圓、その他諸積立金一千五百圓、重役賞與金に六百圓、配當金（年一割二分）一千五百圓、殘額一千三百圓を後期へ繰越してゐるところなか〳〵手堅い配分振りである。

同社が既に創業試練時代をパスして愈々順調を辿りつゝあることは誠に欣しいが、資金の運用に關しては、今少しく研究をつくし、筆者の換起した諸點を考慮して一段の奮闘を期せられるやう望む。

特に同縣下は營業無盡發展の餘地充分であり、同地庶民金融界のためにも同社の將來に對して期待してやまぬ次第である。同社の昭和七年下期末貸借對照表を示せば左の如くである。（單位圓）

資産		負債	
現金預ケ金勘定	一九六、六二一	未拂無盡給付金	一六、一〇〇
有價證券勘定	八、七〇〇	未拂入札差金	四、六五四
貸付金勘定	二七八、三六六	未拂解約返戻金	二、二九九
有價證券擔保	三九、八一六	無盡給付資金	四七五、七〇五
不動産擔保	三、三五〇	假受金	一、五一七
拂込金限度	二二六、一八〇	雜	三〇、二四八
給付金限度	九、〇二〇	株主勘定	一一一、一一四
未收無盡掛金	七六、二五八	資本金	一〇〇、〇〇〇
未濟口	四七、五八七	諸積立金	五、七〇〇
濟口	二八、六七一	當期利益金	五、四一四
代理店貸	〇		
假拂金	二、五三一		
營業用土地建物什器	四、一六一		
動産不動産	〇		
雜	〇		
株主勘定	七五、〇〇〇		
拂込未濟資本金	七五、〇〇〇		
合計	六四一、六五七	合計	六四一、六三七

三重無盡株式會社

〜〜未收整理を望む〜〜

同社の所在地は三重縣南牟婁郡木本町にして設立は三重殖產無盡より一年早く、昭和二年七月である。同縣下に於ては新しき方に屬するのである。資本金は二十五萬圓（內拂込高八萬七千五百圓）營業區域は設立地を中心として一市六郡である。六ケ所の出張所と六ケ所の代理店を配して大阪式及折衷式無盡を經營してゐる。

然し同社の前身は態野無盡合資會社と稱し、大正元年十月の設立、資本金三萬圓拂込濟である。それを株式組織に變更して繼承したもので、現社長齋藤敬一氏は當時の業務執行社員である。

同縣下に於ける營業無盡は總契約高に於ては他縣に劣つてゐないが、平均未收率は高率になつてゐる。即ち六社總契約高は一千六百六十七萬一千圓、未收高は百四十一萬八千圓、其の平均未收率は八分五厘になつて居るのである。全國平均率に比べると約三分の高率となつてゐるので此の點は餘程戒心しなければならぬ。

同社も創業當初に於ては目覺しき契約獲得を見たのであるが近年になつて驚くべき高率未收を示し內容を低下せしめてゐるのである。

同社改組後の契約高、未收高及比率を示せば次の如くである。（單位千圓）

	契約高	未收高	率		契約高	未收高	率
昭和三年上期	三、五三三	二〇九	〇、〇五九	昭和四年上期	三、五六〇	一八四	〇、〇五一
同 五年上期	三、八七九	二〇四	〇、〇三三	同 六年上期	三、七五一	二六三	〇、〇七〇
同 六年下期	三、六四四	三一三	〇、〇八三	同 七年下期	三、〇七五	三八	〇、一〇六
同 八年上期	三、一〇〇	三七一	〇、一二〇				

同社は右の表に示されてゐる如く合資組織時に既に相當の契約を持つてゐた。即ち設立翌年昭和三年上期には三百五十三萬三千圓になつてゐるのである。然るに其の後僅少の增加にとまつてゐる。即ち五年上期の三百八十七萬九千圓が同社の有する最高契約である。その後は、漸減して昭和七年下期には三百七萬五千圓になり、約八十萬圓を當時

より減じた。未收掛金高も三年上期には相當の額に達し比率は五分九厘である。全國平均率を早くも突破して居る。其の後一時は低率となつて居るが、六年上期より再び增加して七年下期には一躍一割六厘の高率になつた。八年上期には契約高が幾分增加して三百十萬圓になつたが、未收掛金は三十七萬一千圓、その比率は實に一割二分といふ高率を示すに至つたのである。

同社が今日まで吸々として努力して來たにも拘らず漸次社業の低下を見て今日に至つたのは同情に耐えぬが、比較的好況時に於て、之れに乘じて昭和四年の如き一割一分の株主配當をなしてゐるは、聊か將來に對する定見なき處置と見られ、其の後新規契約高少く、未收率激增の傾向を著しくして來たので、近年は漸次決算狀況を窮窟にして居るのである。

昭和八年上期間の新規契約組數は五十二組その契約高は四十七萬七千六百圓にして滿了した無盡は三十二組、この契約高は四十六萬一千七百四十圓であり契約高に於て一萬五千九百圓を增してゐる。八年上期末の現金預ケ金は前期の倍額以上になつて二萬六千百八十二圓になり、有價證券が二百三十三圓、手許資金は相當の金額になつてゐるが一方未拂勘定も亦巨額に達してゐる。即ち未拂無盡給付金十六萬七千圓、未拂入札差金一萬六千九百餘圓、未拂解約返戻金三千四百圓を有してゐるから、手許資金關係は決して樂ではない。貸付金勘定は僅々六千九百圓に過ぎず、手許資金の矢り繰りに吸々乎としてゐる事が判るのである。更らに無盡給付資金五萬五千圓の他に、一般假受金、借入金及銀行當座貸越とで五萬六千圓以上あり、この儘で推移すれば將來に於ける資金關係は相當窮迫するであらうことを覺悟しなくてはならぬ。同社を今日の苦境に導いたには財界の不況が最も大きく影響してゐるが從來の惰性から脫しこの際徹底的刷新を劃し堅實なる步調を以つて一路更生の途を辿られるやう望む。然らざれば將來禍根を大きくし、收拾し能はざる狀態になるのではないかを危惧するのである。貸付金は當期末六千九百圓あり、其の利息收入二千二

百餘圓を擧げ、前期は貸付金六千九百圓に對し利息二千餘圓を計上してゐる。何れも年利率六割以上になつてゐるが餘り高利になつてゐるやうに思ふ。尤も掛金の延滯日步が包含されてゐるのではあるまいか。或は期末貸付高を以つて利廻りを算出するは確實を缺く嫌はあるが何れにしても高率に過ぎる樣である。未收無盡掛金の三十七萬一千八百圓は、その內給付濟口未收掛金二十九萬九千圓、未濟口未收掛金七萬二二千圓であるから、相當銷却には努めなくてはなるまい。

次に損益勘定であるが三萬一千二百六十圓の無盡利益金は順當である。利息收入二千二百餘圓と銷却債權取立益金四千圓がある丈けで他の利益項目は取るに足らない數字である。損失勘定に於て目を惹くのは何といふても未收無盡掛金銷却の一萬二千九百餘圓である。之れは同社として寧ろ大きすぎる負擔ではあるが、其の根幹をなす未收掛金を低減して然して病根を去る一つの手術として忍ぶべきであらう。

當期利益金三千七百七十九圓の內四分六厘を社外配出して他は社內に留保してゐるので決算に無理はないが、當社の現狀から推して寧ろ無配を斷行し、內容充實を期すことが賢明なる策である樣に思はれる。筆者は嘗て同社を訪れて親しく同地方の實情を視察したことがあるが、その節齋藤氏の眞摯なる努力には敬服を吝まなかつた。更らに一段の健鬪を切望してやまぬ。

昭和八年上期第十二期の決算貸借對照表は左の如くである。(單位千圓)

資産		負債	
現有價證券	二六、二一八	預ケ金	一、六七、九五三七
貸付金勘定	六、九四三	未拂勘定	三、四八〇
不動產擔保	三、七七〇	未拂入札差金	一、六九〇
有價證券擔保	一、六〇〇	未拂解約返戻金	三、五三三
拂込金限度	三、〇〇〇	無盡給付資金	二、七五〇
未收無盡掛金	三七	假受金	二
有價證券擔保	一、八七二	借入金	七、〇〇〇
未濟口	二、七九	當座借越	三、五一四
濟口	九、〇七五	株主勘定	一、五〇八
代理店貸	七、九七二	資本金	二、〇〇〇
營業用什器	三、一二二	法定積立金	一、五〇〇
所有不動產	一、三八九	別途積立金	三、五〇〇
株主勘定	二、五〇六	退職給與積立金	七、五〇〇
合計	五八〇、一六五	當期利益金	七、五〇〇
合計	五八〇、一六五	合計	五八〇、一六五

華實無盡株式會社

～順調なる發展振り～

近江八景で有名な滋賀縣には二つの無盡會社がある。華實と興業とがそれで同じく大正十四年の創立で資本金は何れも十萬圓（拂込は同社四萬圓興業五萬圓）内容業績共に相近接、何れも優良の折紙がつく。天下を兩分して各々其一を取る底の觀があり、縣内獨占の兩者は萬事兄弟墻にせめがず、同地中産階級金融のために貢獻してゐる。しかも考課狀の數字までが不思議に似てゐる點が多い。何しろ同縣二會社で總契約高千三百二十八萬五千九百圓（七年下期）青森縣の七社、愛知縣九社の總契約高に匹敵し、福島縣五社（七百三十九萬圓）、佐賀縣四社（五百七十萬圓）、熊本縣五社（六百萬圓）等の總契約高を遙に凌駕してゐる。

同社の設立は八月二十三日、興業は十一月十一日、僅かに二ケ月遲れてゐる。契約高は興業無盡の方が華實を常にリードしてゐるが、未收無盡掛金の方は華實が低率になつてゐる。政爭激しい所である丈けに創業當時は兩社の關係はあまり面白くなかつたが、近年はよく協調して業績の向上充實に努めてゐる。兩社二期の對照左の如くである。

（單位千圓）

	六年下期			七年下期		
	契約高	未收高	率	契約高	未收高	率
華實	五、六九二	一九〇	〇・〇三三	六、二八七	二〇一	〇・〇三一
興業	六、三六八	二三九	〇・〇三五	六、九九八	二九二	〇・〇四一

同社創立以來の業績は他の多くの會社の型を破つて、一進一退ではなく、一進又一進の一路を順歩してゐる。これ單に偶然又は幸運の致す所でないことはあらゆる努力の跡に依て證することが出來る。數期對照左の如くである。

（單位千圓）

年度	契約高	未收高	年度	契約高	未收高
大正十四年下期	七八一	六	昭和二年上期	三、四六二	一六一
昭和三年上期	四、〇五四	一四八	同　四年上期	四、九六七	二一三
同　五年上期	五、二九六	一九三	同　六年上期	五、六一七	一八一
同　六年下期	五、六九二	一九〇	同　七年下期	六、二八七	二〇一
同　八年上期	六、七六〇	二三四			

即ち契約高は增進一方の上、その未收無盡掛金も昭和二

年上期の比率四分六厘を最高とし、頗る順調を辿り全國平均の約半率を示してゐることは、尋常の努力でないことを證據立てゝゐるものである。さて同社考課狀中特に目立つものは未拂無盡給付金の激減、並に無盡利益金の漸減等である。即ち未拂無盡給付資金の激增、末十八萬二千圓、十五期二十四萬八千圓と增加して來たものが、八年上期たる十六期には直下十一萬圓となつてゐる之は大阪式特有の給付拒絶が累積、共滿會に至て一時に拂出したものを解釋する外はないが、十四期の給付高は五十六萬七千圓、十五期は五十二萬四千圓、十六期四十萬九千圓といふ計數を見る時、聊か判斷に迷はざるを得ぬ。無盡給付資金の急激なる增加の跡を辿れば、從來未拂無盡給付金で處理してゐたものを無盡給付資金に振り替へたとも思はれる。即ち無盡給付資金は十四期九萬一千圓、十五期は一躍二十八萬七千圓に上つたが更に十六期には二倍以上の六十四萬二千圓を計上するに至つたのである、尤も從來の給付資金は寧ろ過小に過ぎ同期の六十四萬圓といふも之を契約高に比すれば九分五厘に該當し、大阪式無盡經營の同社としては決して驚く程の數字ではないが、同社の給付拒絶が漸次高率になつて來てゐる證據である。然し他社に比べるとまだ低率になつてゐる。無盡利益金の低下は十四期の九萬四千圓、十五期の六萬四千圓、十六期の五萬五千圓といふ風であるが、無盡利益の社内留保に努めてゐる爲めであつて決しての業績低下の徵はないものと認められる。

同社々長中小路與平治氏は、無盡掛金表に對しては加入者の利廻り（借入、積立共）を基礎とし、多年研究を怠らず、過年全國無盡集會所機關雜誌「無盡通信」に其一案を發表したこともある。それ程熱心な研究家だけあつて同社の掛金表も諸種の工夫を遂げ、加入者本位になつて居り、自然給付拒絶の率は他の大阪式無盡に比し少ないものと信ぜられる。例へば口數を三十に止め、期間を六十ケ月即ち五ケ年と爲し、掛金は之を毎月とし抽籤又は入札を隔月に行ふが知き類である。又其東京式を加味した所謂折衷式掛金法を創始し、五百圓、千圓の二種に實行してゐる。之に

從へば等しく三十口六十ケ月で、掛金を等額とし（五百圓會月十圓、千圓會同二十圓）二十五回（五十ケ月）を以て掛け終り、給付順位は各回抽籤を用ゐ、二十五回よりは給付金に割增配當を付ける方法である。即ち二十五回給付者には五百圓配當金二十圓、二十六回三十圓、二十七回四十圓、二十八回五十圓、二十九回六十圓、三十回の最終には七十七圓五十錢を補償してゐる。而して二十三回の給付者は爾後一回三圓、二十四回の給付者は一圓五十錢宛の掛戻金を徵するといふが如きである。斯の如く民情を取入れて掛金の考案を爲す外、地方の有力者を株主並に相談役に收め、以て地方の信望を集め緣故を辿り、着々として其陣營を進めて行くといふ戰法である。同社の株主は實に百十二名を算し、其分布の狀は五株主四十七、十株主三十五、二十株主十四、三十株二、四十株一、五十株四、五十五株一六十株二、等々である。（序に中小路社長は二百三十株）

其他同社貸付金が年八分四厘に廻てゐること、十四期迄はなかつた所有不動產が二千四百圓になつたこと、現金が未拂無盡給付金の約五倍になつてゐることなどが目につく餘白がないから綱評を略し、利益金處分も其七割三分を社內に止めたことを嘉し、終りに切に同社の更に向上發展せんことを祈る。十六期貸借對照表は左の如し。（單位圓）

資產		負債	
現金預ケ金	五二五、〇〇八	未拂無盡給付金	一一〇、四〇〇
有價證券	三九七	未拂入札差金	四二、五九八
貸付金	一六五、五七八	未拂解約返戻金	四〇、九四一
未收無盡掛金	二二四、一七三	無盡給付賞金	六四二、二四三
假拂金	五、〇一九	假受金	二五、七一三
動產不動產	二六、九〇六	入札差金補償準備金	三、〇二五
株主勘定	六〇、〇〇〇	掛金奬勘金	二、二九七
		社員積立金	四、七九九
		其他	四六五
		株主勘定	一四四、二三八
合計	一、〇一七、〇八三	合計	一、〇一七、〇八三

興業無盡株式會社

～業績の經過順當～

滋賀縣二社の一方を擔當する同社も、他方の華實無盡と兄たり難く弟たり難しの業績を擧げてゐる。華實と同じ大正十四年、三ケ月後れて十一月大津市上小唐崎町に設立、資本金は同じ十萬圓ながら拂込高は華實より一萬圓多く半額拂込である。出張所の十、代理店の九は華實より多いが華實はその代り一支店を設置してゐる。大阪式・折衷式の經營も彼我同一、華實無盡の項で述べた通り考課狀の數字迄ひどく近似してゐる。同社の營業經過は又至極順當六年下期の半期に十七萬九千圓の契約差引減を示した外・歩々上仲の一途を進み、未收無盡掛金の上昇歩合も極めて順當である。これらの狀況も華實と伯仲の間にある。華實もそうである如く同社は相當知名の人士を株主に持ち、從つて信望あつた大株主を重役に迎へてゐる。取締役十二名、監査役五名（內常任監査一名）も賑々しいが、これ又同社信賴の一德を有してゐる。殊に同社は營業所を同縣首都に構へた點に於て、他より一歩を有利に導いてゐるものである同縣二社の設立は斯の如き背景と、經營振りの眞摯さとから、かの他地方に行はるゝ如き無盡蔑視の憂ひなきことは頗る喜べき點である。同社の進行過程は次の如くである。

（單位千圓）

	契約高	未收高		契約高	未收高
昭和二年上期	二、七〇五	一一三	昭和三年上期	三、三三一	一一五
同 四年上期	四、五一〇	一六三	同 五年上期	五、一九六	一九二
同 六年上期	六、五五七	二五〇	同 六年下期	六、三七八	二三九
同 七年下期	六、九九八	二九三			

八年上期の契約高は不明だが、若干增加せることは疑なく之れに對し未收無盡掛金は前期に比し遙に激減を示してゐる。之れは大なる努力の跡と見るべく、一氣に內容改善の跡極めて顯著なるものがある。

七年下期に於ける同社契約高は六百九十九萬八千圓、華實無盡に比し六十九萬八千圓の優位にあるが、未收無盡掛金の契約高に對する比率は、華實は三分一厘で一分の低率

を示してゐる。八年上期に於ては再び同社が若干の好績になつたことゝ思はれるが、何れにしても大なる徑庭を生じない事が二社の特徴である。

同社の無盡給付資金は契約高の約七分に該當し華實の倍額近くなつてゐる。特に同社が未拂無盡金を殘さない方針も特異性である。折衷式を加へてゐるため純大阪式の如く給付拒絶は高率ではないが、相當率になつてゐるので資金涵養には留意を要する。此の點は同社も華實も、毎期一萬四五千圓程の資金繰入を行つてゐるが、寧ろ利益金の組入れに注意を拂ひ、煩雜なる手續を未然に防止するに努むべきである。

未拂入札差金の七萬圓は稍々多きに過ぐる觀がある。次回分配制に在つては到達回次丈の差金が殘るのみであるから、此額の多いことは未收分に屬するものと認め得べく、從つて缺口の伏在を想像させる。同社の解約手數料收入も毎期六千圓以上を計上され、之れを千圓會に採算して三百口以上になる。缺口に對しては極力補充に努めなければ、豫定利益に影響を及ぼすといふ迄もない。

同社貸付金十四萬圓の內譯は不動產二割、限度貸が八割を占め、無盡會社の貸付運用技術として確かなものである之れ又華實無盡も同樣だ。限度貸の割合は給付金限度六、拂込限度四の率である。貸付利息は好率一割三分を示し此點華實の九分見當を遙に凌駕してゐる。資金運用は大阪式經營會社の最も緊要なる一部局、此の事に成功すれば經營上惱みは輕減され得る。同社は此條件に當てはまる資格充分と認められる。次に未收無盡掛金の內容は、矢張り濟口七・六、未濟口二・四の比率である。毎期の未收銷却一萬四五千圓內外を續行することはよいが、一面回收努力の自鞭を肝要とする。次に利益金の處分法に就ても兩者は略ぼ其軌を一にし、六割を社內に保留し、四割を賞與配當に充てゝゐる。お歴々の重役株主を有する同社としては此程度の敏腕振りは見せねばなるまい。要するに同縣は二社を以つて無盡王國の共和制を實現し、仲よく其の分野を保つて進む所に多大の强味を有する。設立以來未だ二十期そこ〳〵で

既に全國各府縣の中位たる契約高一千三百萬圓を擧げ、(七年下期調)靑森縣、愛知縣等と比肩してゐる。その給付濟高五百九十一萬圓、それ丈け庶民を潤ほした功績は決して少ないものではない。然し同縣の擴張は寧ろ之れからと云つてよい。華實無盡に於ける所謂仲小路式の掛金表は、相當以上の苦心が潛んでゐるといふ。同社又其の刺戟に依つて研究を凝らし、貯蓄利子、融通利子の均衡を考へ、低金利時の現代に則しても十分の歡迎を得る對策を建てられ度い。而して兩社協力して無盡普及に精進されれば、隣都京都府の四千四百萬圓に迫ることも、亦强ち難しとしないであらう。

同社が業績殆んど華實と並び相當內容の充實を示してゐる點はよく認められる。更らに一層の奮勵を加へ、より飛躍發展することを切望してやまぬ。兩社七年下期の貸借對照表を比較すれば左の如くである。(單位千圓)

資產	興業無盡	華實無盡	比較過△不足
現金預ケ金勘定	三二、四一四	三九一、九二五	△一八〇、五一一
有價證券勘定	六、〇九〇	三九七	五、六九三
貸付金勘定	一四〇、四一九	一〇七、〇一三	三三、四六六
有價證券擔保	一、一〇〇	〇	一、一〇〇
不動產擔保	二六、〇七一	一六、九〇〇	九、一七一
拂込金限度	四四、三一九	三五、三一二	九、〇〇七
給付金限度	六八、九八九	五四、八〇一	一四、一八八
未收無盡掛金	二九三、五三一	二〇一、二七二	九二、二五九
未濟口	六八、五〇四	六七、九七一	五三三
濟口	二三五、〇二七	二三三、三〇一	九一、七二六
代理店貸	一八、四四九	〇	一八、四四九
假拂金	三、七〇二	二、三八二	一、三一〇
營業用土地建物什器	三五、六一五	一六、二一九	一九、三九六
所有不動產	六、二四六	一、九七〇	四、二七六
株主勘定	五〇、〇〇〇	六〇、〇〇〇	△一〇、〇〇〇
負債			
未拂法盡給付金	〇	二六八、〇〇〇	△二四八、〇〇〇
未拂入札差金	七〇、五一八	四三、二二六	二七、二二九
未拂解約返戻金	四六、七五六	二七、一九五	八、九六一
無盡給付資金	四八二、七四三	二八七、九二一	一九四、八二二
假受金	二、九四三	一九、二二七	△一六、二八四
雜	三三、四三九	七、六八七	二五、七五二
資本金	一〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	—
諸積立金	二六、一九九	二五、〇〇〇	一、一九九
當期利益金	二二、九二八	二二、二六九	六五九
合計	七七五、五二六	七八一、一七八	△五、六五二

京都勸業無盡會社

〜社礎の充實に努む〜

京都府下所在八社の總資本金は三百二十五萬圓に達し、大阪府の十六社總資本金を凌ぎ、東京府に次ぎ全國でも第二位にある。契約高は八社總計四千四百九十五萬圓、未收無盡掛金總計は三百四十五萬九千圓、其の比率は七分七厘である。殊に過ぐる七年に於ける帝國共立の破綻に次いで京都無盡の問題が起り、これ又破綻の止むなきに至り、まさに無盡恐慌を招來したことは、古くから發達した同地營業無盡の發展に大なる暗影を投じたこと勿論である。

同社も亦福壽無盡の問題で社長俵氏が不測の災厄に逢ひその影響は決して僅少のものではなかつたが、遊軍として後陣にあつた田崎信藏氏が第一線に立ち、更らに華實無盡から中小路、中村の兩氏を迎へ新陣容の下に營々として更生に努力して來たのである。又俵氏も相談役とは言ひながら毎日出社して從前通り事務を執り、全社を擧げて協心協力新規募集に、集金に全力を傾倒してゐる。

同社は京都市下京區四條通に所在し、資本金十萬圓（全額拂込濟）營業區域は態野、中、竹野の三郡を除いた同府一圓である。設立は大正十一年一月で、同年設立の山城無盡より十ケ月同社の方が早い。創業後の業績は極めて順調なる經過を辿つてゐる。即ち同社創業以降の契約高推移の跡を示せば次の如くである。（單位千圓）

	契約高		契約高
大正十一年下期	五〇〇	大正十二年下期	一、八六〇
同　十四年下期	五、八五五	昭和二年上期	七、一七〇
昭和三年上期	七、三五四	同　四年上期	七、七九〇
同　五年上期	七、四〇七	同　六年上期	七、七二二
同　六年下期	七、三八一	同　七年下期	六、九二三
同　八年上期	六、二七七		

創業直後たる大正十一年下期の契約高五十萬圓からスタートして翌年同期には百八十六萬圓になり、更らに十四年下期躍進して五百八十五萬圓といふ額になり、昭和二年上期陣には七百萬圓を超えるに至つたのである。社長俵氏自ら先に立つての努力が酬ひられたとは言へ實に驚くべき躍

進振りである。然し其後は滿會無盡の到來にも依るが一進一退をつゞけ、昭和七年に入つてからは漸減の傾向を辿つてゐる。之れは一般財界の影響に加ふるに前述した受難時に際會して複雜なる事情が錯綜したことが原因してゐるのである。次に未收掛金及びその比率は左表の如くである。

（單位千圓）

	未收高	率		未收高	率
大正十四年下期	一三一	〇、〇三三	昭和二年上期	一七五	〇、〇二四
昭和三年上期	二〇〇	〇、〇二七	同　四年上期	一九二	〇、〇二五
同　五年上期	二二六	〇、〇三一	同　六年上期	二五〇	〇、〇三二
同　六年下期	二七二	〇、〇三七	同　七年下期	四二三	〇、〇四〇
同　八年上期	四七四	〇、〇七五			

右の如く創業以降昭和六年下期迄は未收率は極めて低率である。即ち大正十四年下期は二分二厘、その後漸增したとは言へ昭和六年下期は三分七厘でそれが最高率であるから同社の未收無盡掛金は極めて低率の好績を示して來たのである。然るに昭和七年下期を劃して契約高は減少し、未收率は急激に上昇した。即ち前年同期より三分三厘を急騰して七分の未收率となり、更らに昭和八年上期は契約高六百二十七萬七千圓、未收無盡掛金四十七萬四千圓、この比率は七分五厘になつた。同縣平均未收率よりも未だ一厘の低率であるが、之れは比較の問題であつて充分戒心すべきである。

さて同社の無盡給付資金であるが、前期よりも十二萬三千圓を減じてゐるが猶八十四萬三千圓の巨額になつてゐるのである。即ち期末契約高に對して一割三分以上に當り、大阪式無盡の惱みたる給付拒絶の高率であることを語つてゐる。未拂無盡給付金はこれ又前年同期より三萬六千圓減じ、餘すところ僅かに二千圓に過ぎないが未拂入札差金と未拂解約返戻金は殆んど變化なく合計七萬五千圓になつてゐる。他方現金預ケ金が三萬九千圓計上されてゐるので先づ當面の資金に窮するが如きことはない。然し新規募集困難のため給付高は入金高を超えてゐるので周到の準備がされなくてはならぬ。貸付金が前期より二十萬六千圓を減じてゐる點に徵しても資金回收に如何に同社が吸々乎としてゐるかが判るのである。更らに借入金、假受金及雜負債は

合計十一萬五千圓になつてゐる點から推しても將來の資金關係には萬全を期し充分の考究が遂げられるやう切に望む同社の資本金十萬圓（全額拂込濟）を遙かに超過して動產不動產の所有が十六萬一千圓になつてゐることは相當運用資金を壓迫してゐるが、近年の財界不況と處分難は同社の契約高から推してもこの程度の保有は免れまい。然し極力これを整理して手資資金の餘裕を作ることに努力すべきである。更らに銷却によつて可及的速かにその內容の充實を計るやうにしたい。貸付金は前期より二十萬六千圓減の五十九萬六千圓になつてゐるが、其の減額が給付金限度貸付にあるのは給付相殺によつて決濟が出來たからであらう。同社現在の貸付金が限度貸付に傾き七割になつてゐるのは誠に欣しく、拂込掛金及び給付相殺によつて決濟がつくので結局それ丈け資金の壓迫を緩和することが出來るのである未收無盡掛金は四十七萬四千圓になり、近年著しく激增した事は前述したが其の內譯は給付濟口未收無盡掛金が全額の約六割を占めてゐるのである。從つてこれが回收には容易ならぬ努力が拂れなくてはならぬが、この點に關しては同社は敢然たる決意を以てして極力これが整理につとめ相當の成績を擧げてゐるので八年下期には改善の跡が充分に現れてゐる筈である。次に同社の强味とするところは同社の加入者の素質が非常にいゝことである。更らに七年下期末二萬二千五百圓、八年上期三萬一千圓の未收掛金銷却をしてゐることは同社將來のためにも欣快に耐えぬ。

次に損益勘定に就いて見るに無盡利益金の五萬六千六百圓は同社の契約高から推しても無理のないやうであるが、無盡給付資金繰入れは一萬九千七百圓になつてゐるのである。給付拒絕が比較的高率になつてゐるのでやむを得ないが、無盡利益の組入には今少しく考究の餘地があるやうである。同社の缺口は同地各社に比し低率になつてゐるが、それでも相當の口數になつてゐる。缺口は給付資金を直ちに壓迫することになるので、これが早期補充と防止は無盡經營上極めて必須の重要事である。

同社の貸付金の收入利益は一萬四千五百圓で貸付金五十

九萬六千圓に對して年率五分に當らない低率である。低金利時とはいへ低率に過ぎる恨みがある。然し貸付金の銷却に九千三百圓を計上して內容の充實を期してゐるので漸次改善されやう。損失勘定に於ける三萬一千圓の未收無盡掛金銷却は收支のバランスを窮窟にしてゐるが實に思ひ切つた決行振りである。今日迄もよく銷却に努めてゐるので諸銷却債權取立益金は九千六百八十圓になつてゐる。同社が銷却整理を斷行して資產內容の充實を計りつゝあるは讃辭を惜まないところであるが、更らに留意してこれを未然に防止するやうすべきでないかと思ふ。

然して當期利益金八千二百二十三圓を擧げて（內三千八十一圓は前期繰越金）法定準備金二千圓、別途積立金一千圓、重役賞與金に五百圓、配當金に（年八分）四千圓の處分し、殘額七百二十三圓を後期へ繰越して居る處は順當と言へやう。同社は近年稍々業績の低下を見てゐるが以上筆者が喚起した諸點に充分考慮され一意專心健闘するに於ては既往の社業に復るのも容易のことであらう。田崎氏を始め同社重役諸氏の新しき經倫と抱負に今後の躍進を待望して擱筆する。

同社昭和八年上期の貸借對照表を示せば次の如くである

（單位圓）

資產		負債	
現金預ケ金勘定	三九、八五八	未拂無盡給付金	二、一一二
貸付金勘定	五九六、一七九	未拂入札差金	二六、二五五
不動產擔保	一三八、六九四	未拂解約返戻金	四九、九五七
拂込金限度	三〇八、六三九	無盡給付資金	八四三、四〇七
給付金限度	一四八、八四五	假受金	七一、三四六
未收無盡掛金	四七四、六一六	雜	四五、七五五
假拂金	八、九八四	株主勘定	二四二、七二三
動產不動產勘定	一六一、九一六	資本金	一〇〇、〇〇〇
營業用土地建物什器否、六五三		法定準備金	四六、〇〇〇
所有不動產	一〇一、二六三	諸積立金	八八、五〇〇
株主勘定	〇	當期利益金	八、二二二
合計	一、二八一、五五六	合計	一、二八一、五五六

京都産業無盡會社

〜同社の將來に期待〜

京都市中京區烏丸通所在の同社は資本金二十萬圓（內拂込高五萬圓）を擁し、京都府一圓を營業區域としてゐる。設立は大正十三年六月であるから、廣濟無盡を除いては最も經歷新しい。

京都府下に於ける無盡界は古來極めて發達し、庶民大衆の利用機關として重要な責務を果して來たことは屢々他の機會に於て述べたが、昭和七年下期の統計に依れば八社總契約高は四千四百九十五萬圓である。京都府の人口を以つてして、しかも產業、商業近年振はない事情にある同地方としては先づ良好の成績と言ふべきである。殊に資本金に於ては總計三百二十五萬圓にして東京府に次ぐ二位を占めてゐるのである。然るに各社の業績內容に就いて檢討するに、近年業績の低下は極めて著しいものがある。尤もこれには特殊の事情が重なり、一時的の現象であると言へば言へる。帝國共立、京都無盡等の問題が京都府の營業無盡に與えた打擊は甚だ大なるものがある。

同社は創業後相當の契約高を比較的速かに獲得したが、收支のバランスは創業經費の壓迫を受け、無配を續けてゐる。然し近年は漸次好轉の傾向を示し、而も同社重役の熱ゆるが如き信念と不折の努力は、同社の將來に對して大なる期待を持たせると共に、借すに數期を以つてすれば全く面目を一新するであらうことを疑はぬ。

同社創業後の契約高、未收高及比率の推移を示せば左の如くである。（單位千圓）

	契約高	未收高	率		契約高	未收高	率
大正十四年下期	一、三二九	三九〇	〇、〇三二	昭和二年上期	一、三二五	六二〇	〇、〇五一
昭和三年上期	一、一〇七	四一〇	〇、〇三七	同　四年上期	一、一三〇	五三〇	〇、〇四六
同　五年上期	一、二一〇	三〇〇	〇、〇二五	同　六年上期	一、三三三	三五〇	〇、〇二六
同　六年下期	一、六二三	四四〇	〇、〇二七	同　七年下期	一、八七五	六一〇	〇、〇三三

創業翌年の大正十四年下期には百二十一萬九千圓の契約高を早くも獲得したが、其の後伸力鈍り、寧ろ契約減の傾向すら現はれてゐるのである。それは政治的に錯綜した問題が表面化して昭和二、三年の頃同社の受けた官邊の壓迫は遂ひに新契約募集停止になり、創業苦心の經營に甚大なる影響を與へたことに依因してゐる。昭和四年上期までは現狀維持の狀態で、未收掛金も相當の率を保ち比率から見れば、四五分の間を往來してゐる。然るに五年上期より好轉の緖光現はれ其の後契約高は漸增の一途を辿り七年下期には百八十七萬圓に達した。未收率は五年上期に於て著しく改善されて二分五厘になつた。其の後も低率をつゞけて七年下期は上昇したが、それでも三分三厘の低率にとまつてゐる。

昭和八年上期末の現金預ケ金勘定は前期より二萬六千餘圓を增加して五萬二千百餘圓となり、他方無盡給付資金はこれも前期に比し六萬三千圓增の二十五萬五千圓になつてゐる。未拂無盡給付金は前期と大差なく一萬三千圓であるから給付は至極圓滑にゆき、手許資金も餘裕を殘してゐる然し未拂入札差金一萬二千圓、未拂解約返戻金六萬三千八百餘圓、更らに無盡給付資金は二十五萬五千圓の巨額に達し、相當滿會到來時には給付支拂資金の增嵩を思はせるのでこれに對しては充分の準備がなされなくてはなるまい。

兎に角同社の一月平均入金高は四萬圓になつてゐるので矢り繰りはつくであらう。同社の拂込濟資本金五萬圓に對して營業用土地建物什器及び所有不動產は四萬四千九百餘圓になつてゐるが、財界不況の今日已むを得ぬことであるとしても聊か多きに過ぎ適當の時機を得て整理するの策を採られるやう望みたい。同社の貸付金十五萬五千圓は前期より一萬五千圓を增加してゐる。其內容は不動產擔保貸付十萬六千圓、拂込金限度貸付二萬四千圓、給付金限度貸付二萬四千圓になつてゐるが、同地方の通弊たる、不動產擔保貸付にその大半を投じてゐるのはどうかと思はれる。不動產擔保は兎角固定し易く、滿會給付金が嵩むやうな場合には、特に不利不便を體得せしめることが多い。殷鑑決して遠からざるを思へば、徹底したる無盡理論を持つ上田氏のことであるから今後はつとめて之れを避け限度貸付に今少しく積極的に轉換されるであらうことを信ずるのである。

收入利息に迷はされ易きは人情の然らしむるところであらうが、君子は危ふきに近よらざるを賢明とする。

未收無盡掛金は前期より一萬五千圓を增加して七萬六千三百餘圓になり、八年上期の期末契約高が判明せぬので其の比率を知る事は出來ないが、此の內容は前期のそれと大差あるまい。前期は給付未濟口未收掛金が六割以上を占めてをり、而も同社は極めて眞面目に銷却を敢行してゐるので給付濟口未收掛金の內容は良質化されてゐやう。何れにしても同社の未收掛金が低率であることは同社經營上の强味になつてゐる。將來もこの程度を保持されるやう望む。

次に損益勘定であるが、同社は數年間利益金又損失金も出してゐない。それは同社が募集費及創立費を未だ六萬三千圓殘してゐるので、之を銷却する爲に各重役は無報酬且つ私財の提供までして吸々乎として努めてゐる。上田氏を始め同社重役諸君の忍苦の精神には敬意を表する。七年下期の雜銷却九千八百七十三圓がそれではないかと思ふ。七年下期の收入利益は無盡利益金二萬圓、解約手數料五千圓貸付金利息八千圓になつてゐるので同社の契約から推して相當の數字を示して居る。然るに一方損失金勘定は總銷却金約一萬五千圓、雜損失が一萬七千圓に達し、それが收支のバランスを不均衡にしてゐる。社長上田氏は稀れに見る研究家であり業務熱心家であるから同社の將來に對しては充分の期待が出來る。八年上期の貸借對照表左の如し。

（單位圓）

資産		負債	
現銀行預ケ金	二〇、八〇	未拂無盡給付金	一三、〇〇
郵便貯金	三一、一五一、九	未拂入札差金	一二、六〇
國債	九二三五一	未拂解約返戻金	五三、一八九七
債券	〇	無盡給付資金	二五六
不動產擔保貸付	一〇六、〇〇〇	假受金	五五、一六九六四八
拂込限度貸付	二四、九三〇	期限未經過無盡掛金	四、六九七
給付金限度貸付	七二四、七五九	申込證據金	一五、一九六
未收無盡掛金	六、三五一〇	擔保見合保證金	三、四三二五八
代理店貸	三、〇六七	敷金	一〇〇、〇〇〇〇〇
假拂訴訟費立替金	一、八、九八四	資本金	五六九、二三〇
營業用土地建物什器	一、一六一四三		
所有不動產	九、一四八		
敷金	四、九七四		
募集費	四二一三〇九		
創立費	六一一〇〇		
拂込未濟資本金	一五二〇〇		
合計	五六九、二三〇	合計	五六九、二三〇

京都無盡株式會社

～～果して更新するか～～

京都市中京區麩屋町通所在の同社は資本金五萬圓（內拂込高三萬五千四百五圓）同府下最少の資本金である。府下八社の總資本金は三百二十五萬圓にして東京府に次ぐ大資本である。その一社當平均は四十萬圓以上になつてゐる。同社の營業區域は京都市他六郡、設立は明治四十四年四月にして實業無盡と共に古き歷史を有する會社である。

同社の經歷は極めて古いがその業績は今日まで殆んど見るべきものなく、常に苦境に喘いで來たのである。然し一時はその契約高は三百萬圓に迫らんとしていたこともあつたが、未收無盡掛金の重壓は遂ひに同社を破局にまで導いた。しかも社長明田孫三郎氏の失綻となり、債權者會議で紛糾する等帝國共立の破綻と前後して、京都の營業無盡界に實に深刻なる打擊を與えたのである。樺井耕藏氏から明田氏に經營が移つてから、契約高は仲び、業績好轉するかに見へたこともあつたが、無盡經營に對する確信なく、從つて根本策が樹立されず、漸次社業を低下せしめ、昭和六年以降は殊にそれが甚しかつた。姑息な彌縫策に終始して引きずられて來たことが、遂ひに同社をして收拾し難くしてしまつたのである。

目下新重役の手に依つて更生を急ぎ、社名を改稱して近く新しき組織を以て臨むらしいが、一度び失墜した信用の恢復は容易のことではなく假りに組織を變更するとしても同社の更生には深刻なる苦難が伴ふことを覺悟しなくてはならぬ。同社はその更生策として債權者に同社の株券を分ちこれによつて債務を解消し、然してこれら從前の會員にして現在株主たるものを基礎として、新しく踏みだす計劃であるらしい。株券への債權振り替への整理方法は他にも例があり、好績を收めてゐるが、同社の事情とは全然趣を異にしてゐる。

同社近年の契約高、未收高及比率を示すに次の如くである。（單位千圓）

	契約高	未收高	率		契約高	未收高	率
大正十一年下期	一、三〇七	不明	—	大正十二年下期	一、四一五	不明	—
同十四年下期	一、六六七	七八	〇、〇四七	昭和二年上期	一、九九三	六五	〇、〇三三
昭和三年上期	二、九〇〇	八八	〇、〇三〇	同　四年上期	二、〇九九	一一〇	〇、〇五二
同　五年上期	二、四四五	九三	〇、〇三八	同　六年上期	一、四二八	九五	〇、〇六六
同　六年下期	一、二九四	一〇五	〇、〇七六	同　七年下期	五六三	一八	〇、三〇九

右表の如く契約高は大正十一年下期の百三十萬圓が其の後昭和三年上期迄は僅少宛ではあるが漸增の傾向を示し三百萬圓近い金額になつた。即ち三年上期の契約高は前年同期より約百萬圓を增加して二百九十萬圓になつたが、翌年同期には約八十萬圓減じてゐる。其の後激減して六年上期には百萬圓臺になり、七年下期は前年同期の半額以下に減じて五十六萬三千圓の僅少額になつたのである。之れは前述した不祥事件の打擊であること勿論である。未收率は非常に變化が多いが概していへば五年上期迄は先づ未收率としては普通の部に屬してゐる。しかし其の後未收無盡掛金は急激に增加し、殊に七年下期の如きは二割九厘といふ高率になつて同社の破綻を裏書してゐる。

さて七年下期末の決算狀態を見るに、全く整理狀態であることが一目にして肯かれる。即ち未給付口は殆んど解約されてしまひ、經過中の無盡は解消してゐるのである。之れは前述の事件が齎した結果であり、免れ難きことであるが、無盡利益金はすでに皆無になつてゐる。期末契約組數は百六十組口數が一千二百四十四口、當期滿期高四萬七千圓に數字丈けはなつてゐる。手許資金は前年同期と同額に近く現金預ヶ金四萬三千四百餘圓をまだ持つてゐるが他方未拂無盡給付金二萬七千八百圓未拂入札差金五千百八十圓未拂解約返戻金六萬四千六百圓が計上されてゐる。無盡給付資金は前年同期より約十二萬圓減じて四萬二千圓になつて居るが假受金と雜負債とが六萬八千圓になつて居り、とに角六萬一千圓の集金して五萬一千圓を給付してゐるが、解約手數料及貸付利息の外は雜益があるだけで整理はなか〳〵容易ではない。貸付金は前年同期から見ると二萬五千圓回收されて四萬二千八百餘圓になり、其の內譯は不動產擔保貸付三千圓、拂込金限度貸付六千二百餘圓、給付金限度貸付五千圓といふ振向けである。給付金限度、拂込金限

度の如きはすでに早く相殺されてゐなくてはならぬのに當期まで計上されてゐるところを見ると實質は頗る疑問がある。利息收入の如きも僅かに一千餘圓であり、不動產擔保丈けが幾分の確實性があるのではないかと思ふ。それも評價の點に於ては計上價格がどれ丈け眞實性を持つかは充分疑ふ餘地がある。しかも同社が資產回收に吸々乎としてゐることは事實である。未收無盡掛金の十一萬八千圓はその中給付濟口が七萬五千八百圓、未濟口四萬三千圓である。濟口未收掛金七萬五千圓の回收も同社の現狀としては先づ困難であると思はねばならぬ。

次に損益計算勘定であるが、無盡利益金及入札差金利益は皆無である。解約手數料、貸付金利息、雜益等にて利益總額僅かに八千圓に對し、損失總計一萬七千圓になり、結局當期損失金九千三百九十四圓を計上してゐる。同社の整理がその後どう進捗したかその具體的なことに就ては八年十月同社を訪れた儘であるから不明だが、とに角此の更生には死を以つて業に當るの大覺悟と、決斷と、そして努力が伴はなければ到底期し難いであらう。誠實一貫の態度で事に望まれたい。

同社七年下期末貸借對照表を示すに次の如し。（單位圓）

資產		負債	
現金預ヶ金勘定	四三、四八七	未拂無盡給付金	二七、八〇〇
有價證券勘定	〇	未拂入札差金	五、一八〇
貸付金勘定	四二、八三三	未拂解約返戻金	六四、六一八
有價證券擔保	九五〇	無盡給付資金	四二、一六八
不動產擔保	三〇、六一一	假受金	一八、六四五
拂込金限度	六、二六七	雜	五〇、九八四
給付金限度	五、〇〇五	株主勘定	五八、二二一
未收無盡掛金	一一八、二三一	資本金	五〇、〇〇〇
未濟口	四三、一七九	諸積立金	八、二二一
濟口	七五、八五二	當期利益金	〇
代理店貸	〇		
假拂金	二七、二三八		
營業用土地建物什器	六、四八六		
所有動產不動產	〇		
雜	五、三五二		
株主勘定	二三、九八九		
拂込未濟資本金	一四、五九五		
當期損失金	九、三九四		
合計	二六七、六一六	合計	二六七、六一六

廣濟無盡株式會社

〜〜収支の改善を望む〜〜

同社は京都市中京區烏丸通に所在し資本金五十萬圓（內拂込高十二萬五千圓）營業區域は京都市を中心として一市七郡に渉つてゐる。設立は昭和二年六月にして同府下に於て最も創業が新しい。

京都府下に現在八社あるが資本金はいづれも多く八社の總資本金は三百二十五萬圓で一社當平均資本金は四十萬圓以上に當つてゐる。契約高は八社總計四千四百九十五萬圓で一社當平均五百六十萬圓以上になり、全國的に見ても營業無盡は極めて發達してゐる。然し近年はいろ〳〵の事情に禍されて新規契約難になり、各社とも著しく社業の低下を示してゐるが同社もこの影響から脱することが出來ず依然として高率の未收掛金に惱んでゐる。

同社創業以降の契約高、未收高及比率を示せば次の如くである。（單位千圓）

	契約高	未收高	率		契約高	未收高	率
昭和三年上期	五五五	一	0.003	昭和四年上期	一、六八二	四五	0.001
同　五年上期	二、二四七	一三八	0.062	同　六年上期	二、八四二	一九九	0.070
同　六年下期	三、一六九	一〇五	0.052	同　七年下期	二、九六二	二三八	0.085

創業當時未收無盡掛金の少いのは通例であり、當社も創業翌年の昭和三年上期末の契約高五十五萬五千圓に對して未收無盡掛金は一千圓、其の比率は二厘と云ふ低率であつた。四年上期には契約高は一躍百六十八萬二千圓に著增し其の後も漸增の途を辿つて來たのである。然るに一方未收無盡掛金はより以上に激增して七年下期末には契約高二百九十八萬二千圓に對し未收無盡掛金二十二萬八千圓になり其の比率は七分七厘と云ふ高率になつたのである。

契約減といひ、未收著增といひいづれも同地の營業無盡界混亂の打擊であることは爭れぬことであり、この點同情すべき點もあるが、そのため漸次社業の低下を見つゝあるは遺憾に耐えぬ。殊に同社の給付拒絶が極めて高率になつてゐる爲めに無盡利益金の計上に非常なる不安があることは最も考慮すべき點であると思ふ。六年下期は無盡利益金

五千圓に對して三千圓の無盡給付資金繰入をしてゐるが、七年下期に至つては無盡利益金九千八百四十六圓に對して無盡給付資金繰入は實に一萬八千九百五十四圓といふ無盡利益金の倍額にも達してゐるのである。無盡給付資金が前年同期には五十七萬三千圓あつたのが當期は三十六萬圓に減じ、且つ當期の入金高よりも給付高の方が二十萬圓から超過してゐるのを見ると滿會給付金が巨額に上つたからではあるがそれにしても今日まで餘りに同社が無盡利益の組入に注意が無さすぎた結果でありこの點に就ては充分の考究が遂げられなくてはならぬ。手許資金關係は七年下期同社の現金預ケ金二萬七千圓、この他に有價證券二千七百圓があり、未拂無盡給付金は皆同になつてゐる。從つて普通給付は圓滑であることが肯けるが何分無盡給付資金はまだ三十六萬圓契約高の一割以上になり、半期二十萬圓からの給付超過になるやうなことはあるまいがそれにしても相當の滿會給付があらうから決して晏如たるを得ない。更に未拂解約返戻金が三萬七千餘圓あるのに徵しても同社の解約は相當高率になり且つ缺口立替拂は僅少額の負擔ではとまるまいと思れる。貸付金は二十八萬九千圓その中不動產擔保貸付は十五萬九千圓、拂込金限度貸付六萬八千圓、給付金限度貸付六萬圓になつてゐるが、不動產擔保貸付の失敗はよく分つてゐる筈であらう。今後は拂込金限度貸付へもつと振替へる必要がありはしないか。尤も同社の貸付金の利息受入が、半期に一萬五千圓七百三十四圓からになつてゐるので利息收入としては先づ順當と云へる。未收無盡掛金は二十二萬八千圓は未濟口と濟口が殆んど同額に近く又毎期一千圓から二千圓近くの不良未收掛金の銷却を行つてゐるので內容は漸次良くなつてゐやうが、この際整理を敢行して今少しく資金の餘裕を作るべきであらう。

轉じて損益關係を見るに無盡利益に就いては前述した通りであり、收益の主體となつてゐるのは貸付金利息である兎に角無盡給付資金繰入の一萬八千圓は同社收支のバランスを甚しく窮窟にしてゐる。同社の將來に處すべき途は今少しく計數的基礎の上に立つて經營することである。

實業無盡株式會社

〜同社の整理は困難〜

同社の契約高は大正十一年上期既に一千三百萬圓に達し斷然契約高に於て全國第一位を占めてゐた。當時は相生無盡が漸く七百十四萬圓に過ぎなかつたのである。それが今日どうであるか。覇業遂げて「實業無盡」の名をなしたのも槿花一朝の夢、同社の沒落はあまりに早く、そして悲慘であつた。同社に就ては述ぶるべき多くのことがあり、同社經營の跡を精細に辿れば無盡經營上の好資料たるを疑はぬが、詳細は他日の機會に讓ることにしてこゝでは最近の狀況に筆をとめることにしたい。

同社今日の禍根は長期五千圓無盡の募集に依つて契約高の增大を誇つた當時既に萠胎してゐた。同社は長期五千圓會の爲に好況時に乘じて二千萬圓近い契約は獲得出來たがその結果はその後の財界不況のために缺口の補充が出來ず巨額の未收無盡掛金に惱まねばならなくなつた。更らに高率なる給付拒絶の保留資金の大部分を不動產に固定せしめてしまつたのである。從つて愈々滿會が殺倒して來るやうになつても、巨額の資金が固定してゐるので滿會給付金の支拂が殆んど困難の狀態に立ち至つてしまつたのである。

同社の契約高及未收高の推移を示せば左の如し(單位千圓)

	契約高	未收高	率		契約高	未收高	率
大正十一年上期	一三、五三三	不明		大正十三年下期	一四、五六六	不明	
同十四年下期	一七、三五〇	〃		昭和二年上期	一三、四七七	九六三	〇、〇七一
昭和三年上期	一〇、四八五	九八六	〇、〇九四	同四年上期	一〇、〇三三	一、一二一	〇、一一一
同五年上期	九、五二五	九九四	〇、一〇四	同六年上期	八、六二〇	一、〇二三	〇、一二八
同六年下期	八、八四七	一、一〇三	〇、一二四	同七年下期	六、五五一	一、四五一	〇、二二一
同八年上期	八、四九七	一、二八四	〇、一六二				

昭和二年上期以前は未收無盡掛金が判明せぬので判らないが、昭和二年上期七分一厘であつた未收無盡掛金は每期甚しき增加を示し七年下期には實に二割二分一厘といふ高率になつた。契約高は大正十四年の千七百三十五萬圓を最高としてこれ又每期激減して七年下期には六百五十五萬一千圓になつたのである。八年上期は新規契約高十六萬九千圓、滿會契約高七十九萬圓結局六十二萬一千圓の契約高減

となつてゐる。全國無盡集會所の調査に依ると七年下期同社の給付金契約高は六百五十五萬一千圓であるから、正確に言へば同社八年上期の契約高は五百九十萬三千圓である筈であるが、同社の營業報告には八百四十九萬七千圓になつてゐるので前揭表にはその通りに書いておいたのである八百四十九萬圓といふのは多分同社の滿會契約高を全部含めた總契約高のことであらうと思ふ。とに角未收無盡掛金の中には滿會未收無盡掛金も入つてゐる筈だから同社の公稱契約高に依ることにした。

同社未收無盡掛金百三十八萬四千圓の中少く共八九十萬圓は給付濟口の未收無盡掛金であり(七年下期の給付濟口未收無盡掛金七十六萬一千圓)同社の現狀としてはこれが回收はなか〳〵容易のことではない。しかも五千圓會無盡がまだ十一組殘つてゐてこれが滿會になるのである。

貸付金の八十五萬二千圓は四十四萬二千圓が不動產擔保貸付であつて、所有動產不動產は七十三萬四千圓の巨額になつてゐる。不動產貸付金は今日迄實質的に何等の整理も出來ず、金額の減少しただけが所有動產不動產になつてただ單に勘定科目が移つただけのことである。しかも貸付金八十五萬二千圓の利息收入が半期僅かに七千圓といふ額に至つては同社の貸付內容がどの程度のものであるかは說明する迄もなく判斷が出來やう。殆んど百十七萬六千圓が固定して動かぬところに、百三十八萬四千圓の未收無盡掛金があり、その回收が思ふに任せぬといふ狀態にあつては、百三十九萬三千圓の無盡給付金の大部分が給付拒絶の滿會給付金であつて每期滿會が百萬圓から二百萬圓近くあつてゐる同社として滿會無盡の支拂ひやうが無いのである。借入金が現に二十八萬八千圓あつて支拂利息を半期一萬七千圓から拂つてゐるのに徵しても如何に同社が給付に困難を感じてゐるかその間の消息が判るのである。

更らに同社の收支計算の數字に目を通せは直ぐ首肯出來やうと思ふが、同社が貸付及所有動產不動產に依る運用利益は貸付金八十五萬二千圓の收入利息七千餘圓、七十三萬四千圓の所有動產不動產の賃貸料一萬五千圓、即ち百五十

八萬七千圓に對する運用利益は僅に二萬三千圓である。然るに借入金等に支拂ふ支拂利息は一萬七千圓になつてゐるこれではどうしても收支のバランスが取れやう道理がないのである。現時の經濟界の不況にあつては貸付金及び所有動產不動產の處分は全く至難のことであり、徹底的に整理を斷行しようにも今日となつては手も足も出ぬのが同社の現狀である。

同社再生の途は整理を徹底的にして多年の禍根を除去するより外にないが、上述の如く容易のことではなく然も姑息な彌縫等によつて當面を糊塗して矢り繰つてゐたのでは愈々破綻へ急ぐばかりである。法定準備金、別途積立金三十五萬圓を崩し、更らに未拂込資本金の拂込を徵收して不良資產を極力整理し同時に資金關係に餘裕を作るやう努力することが同社に殘されてゐる現狀打開策の最も當を得たものであると思ふが同社重役諸君の意嚮は果して如何。難事といへば何事でも難事であり、起死再生のためには大手術の痛さは忍ばなくては望み得ない。

他は後日に讓ることにし、重役諸君の猛省と決斷を要望して筆をおく。同社八年上期の貸借對照表は左の如くである。（單位圓）

資產		負債	
銀行預金	五八、三二五	未拂無盡給付金	一九、五〇〇
郵便貯金	一、二四一	未拂入札差金	六七、五八六
現金	五、八三五	未拂解約返戻金	三三七、一六二
債券	一六七	借入金	二八八、一九五
不動產擔保貸付	四四二、七一〇	假受金	四四、九一四
拂込金限度貸付	三七二、六五五	擔保見合保證金	九二、〇九〇
給付金限度貸付	三七、五〇〇	敷金	二、一五六
未收無盡掛金	一、三八四、九九三	社員信證金	一〇、三七五
假拂金	四九、〇一九	資本金	一、五〇〇、〇〇〇
訴訟費立替金	五、四一四	法定準備金	一四六、〇〇〇
營業用土地建物什器	六二、〇四四	別段積立金	二〇四、九〇〇
所有物動產不動產	七三四、九六〇	社員退職慰勞金	七一、二六〇
敷金	一八〇	當期利益金	二、〇八四
拂込未濟資本金	一、〇二七、五〇〇		
合計	四、一八二、五四七	合計	四、一八二、五四七

商工無盡株式會社

～～契約困難が惱み～～

同社は京都市下京區高瀨川に所在し資本金五十萬圓（內拂込高二十萬圓）營業區域は京都府一圓、設立は大正九年十一月である。

同社は創業以來目覺しき進展を遂げ、穩健着實なる業績を誇つて來たもので嘗ては一割以上の株主配當をして猶餘裕綽々たるものがあつたのである。然るに近年財界の影響深刻なるものあるに加へて、同市業界の旋風的恐慌に逢ひ業績の低下を免れないでゐる。即ち七年末の帝國共無立盡の破綻、京都無盡の不祥事等相次で惹起され、營業無盡の信用失墜甚しく、全く無盡恐慌を現出せしめたのである。之れらの影響は新規契約募集の困難となり、解約缺口續出し、更らに未收無盡掛金を增嵩せしめ同社に限らずその業績に波及するところ大なるものがあつた。

同社の契約高、未收高及比率の推移を示すに次の如くである。（單位千圓）

	契約高	未收高	率		契約高	未收高	率
大正十一年下期	一、一〇四	不明	—	大正十二年下期	三、〇三九	不明	—
同十四年下期	五、六九九	一一九	〇、〇二一	昭和二年上期	六、四九一	一九五	〇、〇三〇
昭和三年上期	七、一九七	一六六	〇、〇二三	同 四年上期	七、四八三	一八六	〇、〇二五
同 五年上期	七、四三三	二〇七	〇、〇二八	同 六年上期	七、七二七	二六四	〇、〇三四
同 六年下期	七、八四〇	三一一	〇、〇四〇	同 七年下期	八、三三三	四〇六	〇、〇四九

右の表の如く同社の經過には目覺しきものがある。即ち大正十一年下期には契約高百十萬圓位であつたが、翌年同期には一躍三百萬圓以上になり、大正十四年下期は五百萬圓、昭和二年上期六百萬圓、三年上期は七百萬圓を超えて驚くべき躍進振りを示してゐる。其の後も漸增の傾向を辿つて昭和七年下期末の契約高は八百三十二萬圓に達した。未收無盡掛金は昭和五年上期迄は極めて低率にして、その比率はいづれも二分臺といふ低率を維持して來たのであるが、六年上期より稍々上昇し、七年下期には四分九厘になつてゐる。未收率から見れば未だ全國平均未收率より低率になつてゐる。同社は大阪式及東京式だが現在は再び大阪式になつてゐる。近時は特に大阪式無盡の通弊に惱まされてゐ

る。即ち給付拒絶は同社の無盡利益金を甚しく減じてゐるばかりでなく、新規募集の減少、滿會無盡の殺倒は支拂資金を著しく增加せしめ、資金關係を壓迫してゐる。

さて昭和七年下期末の決算狀況に就いて見るに、期末契約組數二百六十組、口數一萬一千五百四十四口、當期新規契約高八十萬四千圓に對して當期滿期高は百十三萬六千圓の多きになつてゐる。之れは御大典紀念募集前後のものが滿期到來してゐるからで現在では到底それだけの新規募集は困難な事情にある。從つて六十八萬圓の當期入金高に對して、當期給付高は實に九十八萬七千圓になり、三十萬圓からの支拂超過である。

次に手許資金關係であるが當分はどうしても滿會給付金支拂のために支拂超過の傾向は持續されると見なくてはならぬので資金關係には餘裕が無い。未拂無盡給付金は前年同期より五萬一千圓を減じて十二萬六千圓、無盡給付資金は三十四萬二千圓減じて八十九萬五千圓となつたのはそれ丈け給付金が支拂はれたからである。然して現金預ケ金は九萬八千圓減の二十四萬七千圓、有價證券勘定十四萬圓が支拂準備金として保有されてゐるので當面の給付金支拂には痛痒を感じないがこゝ數期二十萬圓以上の支拂超過がつゞくやうでは不安である。更らに雜負債と假受金とで二十四萬圓計上されてゐるがこの中には借入金も含まれてゐるのではないかと推測される。此の際新規契約獲得に極力努力し、更らに未收掛金の回收を計り資金關係の不安を一掃すべきである。貸付金が前年同期より十萬七千圓減じて六十五萬四千圓になつてゐるのも資金回收に吸々としてゐることが親知出來るのである。貸付金の內譯は不動產擔保貸付が首位を占め、拂込金限度貸付及給付金限度貸付は不動產擔保貸付と同額になつてゐる。不動產擔保貸付必ずしも惡くないが、限度貸付に較べると遙かに固定し易く、殊に滿會給付金のために今日の如く資金を要する場合直ちにその回收難は資金を枯渴せしむるのである。此の點に就ては將來も特に考究すべきであると思ふ。未收無盡掛金の四十萬六千圓は給付未濟口九萬三千圓給付濟口三十一萬三千

圓であるが、これが銷却にはよく努め七年下期は一萬三千圓の銷却をしてゐる。同社の拂込資本金二十萬圓に對して所有不動產が二十七萬五千圓になつてゐるのはいさゝか過大の觀があるが、營業用建物は相當の利潤を上げて居り、又所有土地建物の增加も現時の不況時には防ぎ得られないだらう。然し極力資金化に努力すべきである。

次に損益勘定であるが無盡利益に關しては前述したが當期は四萬八百圓になつてゐる。契約高の八百三十三萬圓から推算すれば少くとも六七萬圓にはなる筈であるが、同社の給付拒絕が多いのと解約缺口が高率になつてゐるので無盡利益が犧牲にされてゐるのである。近時の解約傾向は未拂解約返戻金が十萬四千圓になり、解約手數料が七千七百圓計上されてゐるのに徵しても判る。當期利益金九千四百六十九圓を擧げこれを法定準備金に一千圓、八千圓（年八分）を配當金に處分し、殘額四百六十九圓を後期へ繰越してゐる。この處分振りはいさゝか無理があるやうである。

同社當面の問題は資產內容を整備して資產の餘裕を作ることである。更らに進んで新規契約を常に滿期高以上に獲得するに努め、既往の業績に復するやう期されたい。社長野村氏の健闘よく所期の成績を擧げ、社業の隆昌に向はんことを望んでやまぬ。

同社七年下期末の貸借對照表を示すに次の如くである。

（單位圓）

資產		負債	
現金預ケ金勘定	二四七、三〇〇	未拂無盡給付金	一二六、六〇〇
有價證券勘定	一四〇、一七二	未拂入札差金	三〇、一一一
貸付金勘定	六五四、一二三	未拂解約返戻金	一〇四、五〇〇
不動產擔保	二八五、八一九	無盡給付資金	八九五、三七五
拂込金限度	一八九、六二六	假受金	一五、二五五
給付金限度	一七八、六七八	雜	二二四、六八七
未收無盡掛金	四〇六、七四九	株主勘定	六三二、二三八
未濟口	九三、六五二	資本金	五〇〇、〇〇〇
濟口	三一三、〇九七	諸積立金	一二二、七六九
假拂金	四、九七九	當期利益金	九、四六九
所有動產不動產	二七五、四四三		
株主勘定	三〇〇、〇〇〇		
拂込未濟資本金	三〇〇、〇〇〇		
合計	二、〇二八、七六六	合計	二、〇二八、七六六

帝國共立無盡會社

〜〜內部整理を急ぐ〜〜

京都市下京區萬壽寺通烏丸西入所在の同社は大正五年三月の設立、創業當時は資本金五萬圓であつたが增資して現在の三十萬圓（內拂込高十一萬二千五百圓）になつた。由來京都市は營業無盡の盛な地にして同社の如きも大正十四年末には既に契約高一千萬圓を突破するの成績を擧げてゐる然るに過般の破綻に依つて同社今日までの社礎は根柢から破壞され、更生は到底不可能とまで憂慮さるに至つたのである。同社が今日の悲境を招來した主因は巨額の資金を固定せしめて運用資金に窮迫した結果にあるは言ふ迄もないが、同社經營者が方策を誤り、適應の策を講じ得なかつたが爲めにかく破局を早めたといつてよい。同社が運用資金に窮してゐたのは何も近年のことではない。不動產貸付及所有不動產等に百數十萬圓を固定せしめ資金關係は甚しく枯渴してゐたのである。然るに山城無盡に刺戟されて東京式無盡に轉ずるに至つて收拾し難くなつてしまつた。成程新規契約は出來た。然し同社の如く二百萬圓近くの給付資金を擁し、滿會到達每に滿會給付金の支拂に苦慮焦燥しつゝある狀態に於て假令東京式無盡の新規契約が如何に出來たところで、それに依つて資金の餘裕が生ずる筈は絕對にあり得ないことは明瞭のことである。層一層資金關係を窮窟に導くとも新規契約に依つて少くとも緩和されるといふことはあり得ない。巨額の滿會給付金がなくしかも百數十萬圓の殆んど資金化不可能の固定資產が焦げ着いてゐないならいゝが同社のやうな事情の下に於ては寧ろ無暴と言ふべきである。この點に就ては、筆者は同社經營者へ直諫し必ずや資金關係に於て破綻すべきことを警告したのであるが不幸にして入れられなかつたのである。必ずしも東京式無盡を以て新規契約に焦慮したことが、同社破綻近因の最大のものでなくともそれを早めたことは事實である。

先づ同社の契約高及び未收掛金の推移から示ぜば左の如くである。（單位千圓）

	契約高	未收高	率		契約高	未收高	率
大正十一年下期	一、七九七		—	大正十二年下期	七、八一七		—
同十四年下期	一〇、七九九	一三三	〇、〇一一	昭和二年上期	一一、三六三	一八八	〇、〇一〇
昭和三年上期	一三、〇二七	三二六	〇、〇二七	同　四年上期	一三、一三三	三二四	〇、〇二五
同　五年上期	一三、一三九	二六二	〇、〇二一	同　六年上期	一三、一四七	三六五	〇、〇一七
同　六年下期	一四、〇四〇	四九五	〇、〇三五	同　七年下期	八、四一一	五四七	〇、〇六三
同　八年上期	五、六九四	五六九	〇、〇九九				

右表の如く大正十四年下期には早くも一千七十五萬九千圓になり、其後每期漸增して六年下期には一千四百四十萬圓といふ數字を示すに至つた。即ち六年上期の新規契約高は二百八十五萬圓下期は二百四十四萬一千圓に達し、同社としては記錄的の膨脹を遂げたが、それにも拘らず遂ひに七年下期には破綻を來し、契約高は八百四十一萬一千圓に減じ、未收無盡掛金は五十四萬七千圓に急增したのである七年下期に於ける滿會高は百八十五萬二千圓（新規契約が十九萬九千圓）であるが、六百萬圓からの契約減になつてゐるのに徵しても、解約に依る契約減が如何に多かつたか推測出來やう。

當期間中の入金高は漸く六十九萬七千圓でしかも給付金は七十五萬五千圓になつてゐる。猶損益の關係に就て見ても無盡利益の二萬二千圓に對して無盡給付資金繰入が二萬圓になり、收入利益の最大額は實に解約手數料の七萬二千圓である。同社が一度び整理狀態に陷るや京都全市に旋風の如き衝激を與へかくの如く解約の殺倒となつたのである八年上期はこの後を受けて吸々乎として整理に沒頭して來たのであるが、地に墜ちた信用は容易に恢復すべきものでなく整理遂行に非常な困難が伴ひ、且つ所有動產九十三萬八千圓の處分難は整理の徹底を甚しく防げてゐる。八年上期に於ける滿會無盡は百二十四組、六十九萬四千圓、この他組替整理の爲めの解約契約減が二百二萬二千圓の巨額になり、結局契約高は五百六十九萬四千圓に激減するに至つたが、この組數八百六十二組の中舊無盡七百十五組、更新無盡百四十七組で舊無盡に殘存せるものは組替不能の給付濟口及組替未確定の未濟口であつて當然整理されなくてはならぬものである。

百九十萬圓からあつた無盡給付資金が二十一萬圓に減じ

てゐるが未拂無盡給付金が五十萬四千圓といふ額になり、その他期限未經過掛金三十一萬五千圓、借入金二十四萬四千圓等勘定科目の數字に移動を見ただけであつて依然として資金關係は所有不動產が整理されざるに於ては根本的解決は不可能ではあるまいかと思惟される。岡崎宏公氏を招して極力整理に努め兎に角資產負債のバランスは整つたが帳簿上の數字の整調を以て同社が好轉したと見るは早計であり、同社の眞の整理はこれからのことに屬するのである如何にして資金關係の苦境から脫するか、勿論固定資產の整理さへ出來れば容易のことであるが、今日急速にそれは望み難く、日本共立無盡からの借入金も返濟を急がれて居り、日本共立無盡の太田氏は相當强抗に之れを主張してゐるやうであるからこれも何とか解決しなくてはなるまい。勿論同社は整理强行のため重役を一新し配するに人材を以てしてゐるので新重役の力腕に俟つ外ないが、新重役の重責思ひ切つた果斷決行が同社更生のためには必要であらう

前期間中に於ける給付確定高は二十萬三千圓、之れに對して給付濟高二十九萬九千圓（給付內譯當期に於て當籤又は落札に依る給付濟高二十萬三千圓、前期繰越滿會分九萬九千圓）又解約支拂高は解約決定高九十六萬五千圓に對して九十五萬四千圓を支拂つて居り、加入者の不安一掃に努めることに吸々として努力してゐるので、運用資金さへ今少しく餘裕が出來れば漸次改興に向ふことも出來やう。同社重役諸君が根本的の整理大綱を確立して勇猛果敢よく重責を果されんことを切望してやまぬ。

更らに轉じて損益の狀況を見るに、現在の同社として損益のバランスに無理の伴ふのはやむを得ないことであるが依然として解約手數料が最高の收益を示し三萬二千圓、貸付金利息一萬圓、雜益二萬四千圓等計九萬二千圓である。貸付金利息の一萬圓は順當だが、土地建物賃貸料の八千圓は所有不動產九十三萬八千圓の賃貸料としてはあまりに過少である。然し同社が營業收益八萬七千圓、營業費約七萬一千圓、差引一萬六千餘圓の利益金中から一萬五千圓を不良資產の銷却に當てゝゐるのは欣しい。

所有不動產及び不動產擔保貸付金計百五萬九千圓の處分は既述の如くなか〳〵容易のことではなからうし、假りに或程度の處分が出來たとしてもその爲めには可なり巨額の損失を出さなくてはなるまい。現に前期間中に於ては幾千も處分されてゐないが、それでも五千八百圓の不動產賣買損が計上されてゐるのである。この點が同社の整理上の惱みではないかと思惟される。

今京都所在の各社は山城無盡を除けばいづれも新規契約難にあり、同社が假りに內部整理を急ぎ、新規契約の募集を實現するに至るとしても、新規契約の募集は同市現在の狀勢から推測すれば、非常なる困難が伴ふことを覺悟しなくてはなるまい。

かく觀じ來る時、同社の整理更生には猶幾多の困難が伴ふことを覺悟しなくてはならぬが幸にして現新重役諸君が協力一致よく整理を完了して、失墜せし同社の信用を恢復し、且つ同地營業無盡發展の爲めに努められるやう切望してやまぬ次第である。

最後に同社重役諸君の健康を祝して擱筆する。

同社第四十期（昭和八年上期）の貸借對照表は左の如くである。（單位圓）

資產		負債	
現金	一〇、九二八	未拂無盡給付金	五〇四、九八七
銀行預金	三八六	未拂入札差金	五八、六三二
郵便貯金	一、五一四	未拂解約返戻金	二一〇、二二六
國債	五二一	無盡給付資金	一一七、一三五
不動產擔保貸付金	一二〇、八一一	借入金	二三三、四三〇
拂込限度貸付金	五一、七七〇	當店借越	一一、一七五
給付金限度貸付金	六五、八八六	假受金	二四、七三五
未收無盡掛金	五六九、〇八一	期限未經過無盡掛金	三五、四〇四
假拂金	三〇、三八三	擔保見合保證金	五、〇七四
訴訟費用立替金	三、三七九	敷金	七二四
營業用土地建物什器	二三、九七六	社員信認金	二三、五六一
所有動產不動產	八一五、四八一	資本金	三〇〇、〇〇〇
拂込未濟資本金	一八七、五〇〇	法定積立金	四一、五〇〇
		別途積立金	一二三、〇〇〇
		役員社員退職慰勞基金	九、一四二
		當期利益金	一、七九〇
		（內前期繰越）	一、三四三
合計	一、九八〇、五一九	合計	一、九八〇、五一九

山城無盡株式會社

〜〜經過極めて順調〜〜

同社では去る七月十九日無盡契約高一千萬圓突破記念として招待會を開き盛大にこれを擧行した。最近に於ける同社の活躍は眞に目覺しく、過般の京都無盡界を捲席したる恐慌に際しても微動だにせず愈々その社礎を確固不拔のものにしてゐる。同社の今日あるは實に松原社長の細心にして果斷なる經營の結果にして京都に東京式無盡を率先實施したのも同社であり、最近は又日掛無盡を採用して異常なる成績を擧げてゐる。同社が常に經濟、社會の動向を正視して、その動きの中に金融組織を生かさんとする眞摯な研究的經營態度は、よく好果を收め、今や斷然他社を壓してわが營業無盡界に於ても有數の代表的會社たるの內容を具備するに至つたのである。

同社は京都府上狛町坤町所在、大正十一年七月一日の創立で資本金は十萬圓、內拂込高二萬五千圓である。營業區域は京都府一圓になつて居り、宮津町京都市の兩支店の外に伏見、福知山に出張所を設けてゐる。同社八年上期の新規契約高は口數四千二百十四口、契約高は百七十六萬八千圓、每月平均二十九萬四千圓に當つてゐる。左記京都府下六社の新規契約狀況の一班に就て見ても判るやうに同社の飛躍には他社の追從を寄さぬものがある。（單位圓）

	五月	六月	八月
商工無盡會社	一〇〇、八〇〇	九五、八〇〇	一二〇、〇〇〇
實業無盡會社	三六、〇〇〇	一八、〇〇〇	一八、〇〇〇
京都勸業無盡	六〇、〇〇〇	七五、〇〇〇	七五、〇〇〇
廣濟無盡會社	三六、〇〇〇	九五、二〇〇	二三、六〇〇
京都無盡	四五、〇〇〇	一〇七、六〇〇	五一、〇〇〇
山城無盡會社	二一六、八〇〇	三一四、五〇〇	二九〇、一〇〇

同社がかくの如く飛躍に次ぐに飛躍を以てしてわが沈滯せる營業無盡界に斷然氣を吐きつゝあるは同社が東京式無盡經營に移つてからのことであり、最近の契約高及び未收の推移を示せば左の如くである。（單位千圓）

	契約高	未收高	率
大正十一年下期	六〇〇		
大正十四年下期	四、三三	六一	〇・〇〇一
昭和二年上期	六、六九四	一四一	〇・〇二一
同四年上期	五、八〇二	二三九	〇・〇四〇
同六年上期	七、四八八	二三二	〇・〇三〇
同七年上期	八、八六九	二四二	〇・〇二七
同八年上期	一〇、六八三	二四七	〇・〇二三
昭和三年上期	五、一〇四	一六九	〇・〇三二
同五年上期	六、二八四	二四五	〇・〇三九
同六年下期	八、四八〇	二三五	〇・〇二七
同七年下期	九、三一一	二三三	〇・〇二四

創業直後の大正十一年下期六十萬圓であつた契約高が十四年末には四百三十二萬二千圓になり、更らに昭和二年上期には六百六十九萬四千圓といふ額になつた。この前後が京都無盡界華かなりし黃金時代とも言ふべく、京都の無盡界は昭和四五年間を頂點として漸次下り坂になつてゐる。同社の無盡契約は三年上期は五百二十萬四千圓に減じ、その後幾分づつの增加を示してゐるが五年上期迄にはまだ二年上期に於ける契約高に復することが出來なかつた。それが東京式無盡經營に移つた六年上期から每期著しく增加し八年上期には遂ひに一千萬圓を超えるに至つたのである。他方末收無盡掛金は四年上期の四分を最高として漸減の一途を辿り、前期は二分三厘といふ低率になり、七年下期に於ける京都府の平均未收掛金率七分六厘に較べると非常なる懸隔である。

次に同社の資產負債の內容を檢討することにし、先づ資產勘定の異動から調べて見やう。（單位圓）

	八年上期	七年上期	六年上期
現金	五八、九四〇	三九、二八一	三九、二六五
銀行預ケ金	一九九、〇八四	二〇二、八三六	二三一、九二〇
振替貯金	六九七	四二七	一、〇二一
國債	一、七二五	一、五二五	二、二六八
債券	九六六	八三九	—
有價證券貸付	一六五		
不動產擔保貸付	一四六、二〇九	一、三四五	三九〇
拂込限度貸付	二三、四二〇	一七二、六九七	一六五、五〇四
給付金限度貸付	四六、九五八	二八、五九五	四八、〇九三
未收無盡掛金	二四七、五五三	五四、五四三	—
代理店貸		二四二、九四七	二三二、五七七
集金假勘定	五、六八九	五、六八九	五、六八九
假拂金	三、四七九	五、一二六	七、五二三
訴訟費立替金	五、〇二〇	六、四二〇	四、九六七
立替金	九、三〇〇	六、五五〇	五、三八四
營業用土地建物什器	三五、一三七	三一、〇二二	七、七一〇
所有動產不動產	三三、一五七	二一、六二四	一五、五三一
敷金	七八、七八九	四四、〇七三	三五、二〇四
拂込未濟資本金	一、〇七〇	四七〇	四〇〇
	七五、〇〇〇	七五、〇〇〇	七五、〇〇〇

同社の資産勘定は過去三ケ年間に於て全般的に大した變化はない。現金預ケ金勘定は七年上期の二十四萬二千圓が二十五萬八千圓になつたが、貸付金は反つて僅少ながら三萬九千圓を減じて、二十一萬六千圓になつてゐる。同社の貸付は全貸付金の六割八分が不動産貸付になつてゐて、掛金限度の貸付は漸く二萬三千圓である。七年上期に較べると不動産擔保貸付金は二萬六千圓を減じてはゐるが、東京式無盡經營の同社として今後は今少しく掛込金限度貸付に就ては研究の餘地がありはしないかと思ふ。貸付金の收入利息から見ると不動産擔保貸付金には將來整理處分されねばならぬものがまだ殘存してゐるやうに推測されるが、この點に就ては同社も常に深甚の考慮を拂ひ毎期四千圓からの銷却を行つてゐるので貸付內容は著しく改善されやう。所有動産不動産の額も漸次增加傾向にあるが所有動産不動産賣買益金が一千圓計上されてゐるのを見ても同社の評價格の妥當さが肯かれるのである。何としてく契約高一千萬圓を超へる同社の未收無盡掛金が二分三厘、二十四萬七千圓にとまつてゐることが同社經營上の强味となつてゐるのを見逃せぬ。轉じて負債勘定を見るに左の如し。（單位圓）

	八年上期	七年上期	六上期末
未拂無盡給付金	一二九、二四六	一七九、一一七	一八九、五八九
未拂入札差金	一〇八、二一六	一一七、〇〇五	八七、九二九
木拂解約返戻金	二〇四、七一六	一五七、〇四八	一二二、七八二
無盡給付養金	二九六、二〇二	二六六、三七五	二七二、〇一二
無盡日掛金	一、二二〇	一三一	—
假受金	五、三〇九	二、〇八〇	一、二九八
申込證據金	九〇四	二、八五一	一、四三〇
擔保見合保證金	六〇、四二九	五四、七五五	四五、四七一
未拂配當金	一一九	三一七	二一五
社員信認金	一七、二七九	一六、二一九	一七、一七一
賃本金	一〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇
法定準備金	一一、二五〇	九、八五〇	八、四八〇
別途積立金	三〇、〇〇〇	二七、八〇〇	二五、〇〇〇
稅金引當備金	三〇〇	九〇〇	七〇〇
當期利益金	六、七七八	六、五六一	六、三〇二
（前期繰越高）	二、一八五	二、七〇一	

未拂無盡給付金は六年上期の十八萬九千圓が漸減し、八年上期には六萬圓減の十二萬九千圓になつてゐる。同社の期限到達高は半期百萬圓を出てゐる筈であるから十三萬九

千圓は漸く一ケ月に足らぬ額で保證調査中の未拂給付金のみであることが判る。一時減じた無盡給付資金が增加して二十九萬六千圓になつたのは契約高著增の結果であり、近く以前の大阪式無盡は全部滿會定了するのでこの勘定科目の金額は將來とてもこの程度のところを動かぬであらうと思はれる。

未拂無盡給付金の額から言つても無盡給付資金內容から見ても資金關係は極めて良好であり、充分の餘裕を示してゐる。未拂解約返戻金が二十萬四千圓といふ額になつたがこれは同社の未收無盡掛金整理の結果であり、給付未濟口の未收無盡掛金を徹底的に整理して或は解團組替の方法に依つて團の實質的充實を計つたのではなからうか。解約手數料の收入が前期は一萬一千圓になつてゐるのもこの爲めであると思はれる。京都市內の會社は殊に昨年の事件以來缺口の激增に全く惱みぬいてゐる。同社も東京式無盡經營以來缺口の防止には全力を傾倒して努力して來たが、缺口數は一時相當の數になつたやうである。同社が改團組替に依つて內容の充實を期するのは當然であり、從つて未拂解約返戻金の增加が伴ふのは免れぬことである。

日掛無盡經營による影響はまだ日が淺いのでさほど現はれてゐないが、こゝ數期間には相當顯著な形で資產及負債勘定に現れるであらうと思はれる。

法定、別途の兩積立金は計四萬一千餘圓になり、拂込資本金二萬五千圓を超えること一萬六千圓になつてゐる、同社が毎決算に於て社外配當は純益金の二割五分程度にとどめ努めて社內に留保するやうにしてゐるのは同社經營の堅實さと社長松原氏の信念をよく語るものである。

同社は同社の無盡經營を根本から立て直して未だ日が淺い漸く試練時代を拔けたところである。然もこの成績を上げ猶吸々として營業無盡の合理的經營研究につとめ、現下の經濟情勢の中に營業無盡の組織を生かすべく實踐奮勵しつゝある眞劍な態度に敬服するの外ない次第である。從つて同社の前途に對しては筆者は絕對的に信賴を持つと同時に多くの期待をかけてゐるわけである。

和泉無盡株式會社

～未收掛金に惱む～

大阪府泉南郡佐野ヶ町に所在する同社は資本金十萬圓、（內拂込濟高貳萬五千圓）を以つて、大正十四年十月設立にして、決算期を閲する事實に十五回に及ぶが、其の過去の業績を窺ふ時甚だ萎微振はざるものがある。昭和二年上期の二十五萬二千圓をスタートに昭和六年上期迄は逐期漸增の傾向を辿つて來たのであるが、昭和六年下期より業績逐次低下を示して居る。

昭和八年上期に於ける無盡契約組數は五百圓會九組、加入者口數百九十八口、其の掛金契約高は十一萬三千二百八十九圓四十錢であるが、之を前期に比較すれば、無盡契約高に於て五百圓會六組加入者口數に於て七十八口を增加して居る、昭和八年の上期末に於ける給付金契約高は不明なるも前期よりも五百圓會加入者口數七十八口增加して居ると云ふから、前期の契約高五十九萬九千二百圓よりも三萬九千圓增した六十三萬八千二百圓が昭和八年上期末の契約高と見て大差なからう。即ち同社の契約高推移を示せば左の如し。（單位圓）

昭和二年上期	二五二、〇〇〇	昭和三年上期	三四二、〇〇〇
昭和四年上期	四二八、〇〇〇	昭和六年上期	四九一、〇〇〇
昭和六年上期	七七六、〇〇〇	昭和七年下期	六〇一、二〇〇
昭和七年下期	五九九、二〇〇	昭和八年下期	六三八、二〇〇（約）

未收無盡掛金の趨勢を辿るに昭利二年上期に於ては、契約高二十五萬二千圓に對し四百十六圓其の率から見れば一厘六毛と云ふ極めて低率であつたものが、翌年は早くも三十四萬二千圓に對し四千六百五十二圓の一分三厘六毛と云ふ率に上昇し、四年上期は三分四厘、五年上期が五分五厘八毛、六年上期は五分四厘と逐期激增の傾向を示し居り、昭和六年下期の如きは契約高は前期よりも十七萬四千八百圓減額して居るにも拘らず、未收高は前期よりも一萬一千九圓增の五萬三千十九圓、率八分八厘と云ふ高率を示して居る。更に昭和七年下期に至つては契約高五十九萬九千二

百圓に對して未收高六萬二千百七十三圓、其の率は一割三厘九毛と云ふ高率に急騰した。尤も昭和八年上期に於ては契約高約六十三萬八千二百圓に對し、五萬六千九十七圓であるから其の率八分七厘九毛になり、前二期に比較して稍々低率を示して居る。かくの如き未收無盡掛金の激增は近年財界一般の不況に影響される事勿論であらうが、昭和六年下期より昭和七年下期に其の打擊最も著しきものを見る昭和八年上期に於て、幾分回復の緒光を見たと雖も、猶八分七厘九毛と云ふ依然として高率である。

同社の未收高と未收率の推移を示せば次の如し。（單位圓）

昭和二年上期	四二六	〇、〇〇一六	昭和三年上期	四、六五三	〇、〇一三六
昭和四年上期	一四、五二六	〇、〇三四	昭和五年上期	二七、三七一	〇、〇五九八
昭和六年上期	四二、〇一〇	〇、〇五四	昭和六年下期	五三、〇一九	〇、〇八八
昭和七年下期	六二、一七三	〇、一〇三九	昭和八年上期	五六、〇九七	〇、〇八七九

同社の掛金方式は大阪式であるが給付濟前の掛金額と、給付濟後の掛金額との差が餘り過大に過ぎはせぬかと思はれる殊に同社乙種五百圓會掛金表を見る時二十三回、二十四回目は給付未濟者は月額三圓に對し、給付濟者は月額九圓、丙種五百圓會の拾九圓以後は給付未濟者は月額三圓、給付濟者は月額十圓になつてゐるから、給付濟後は給付前よりも三倍若しくは三倍以上の掛金をする事になつて居る同社昭和八年の上期の貸借對照表を見るに、無盡給付資金三萬六百八十一圓は決して同式の經營無盡としては多額の方ではないが、未收無盡掛金が五萬六千圓といふ額になつてゐるので資金運用には餘裕がなく漸く一萬五千圓を貸付金として計上してゐるに過ぎない。しかもその利息は七年下期の損益に徵しても僅々四百五十五圓といふ低率である現金預ケ金の三千餘圓は未拂無盡給付金及其他未拂勘定に目を通せばいさゝか窮窟の觀がある。未收無盡掛金の整理に努力して資金の潤澤を期することが急務であらう。

損益計算が記してないので八年上期の無盡利益金は不明であるが、七年下期は契約高九十九萬九千圓に對し無盡利益金が一萬四千百九圓揚げられて居るが、無盡利益の組入に無理がありはしないかを案ずるのである。此の點無盡掛金表の研究と共に同社重役の再檢討を促したい。

大阪勸業無盡會社

〜〜前期が二期の決算〜〜

大阪府下に於ける無盡會社の現在數は十七社にして東京府に比すれば七社少いのである。十七社總契約高は七千七百四十萬圓にして東京府下の二十四社總契約高二億九千九百六十萬圓に比較すれば大阪は東京の二割六分位の契約高である。一社當平均契約高は四百五十五萬圓で、總未收高は二百七十三萬八十圓であるから平均未收率は三分五厘である。何れにしても大阪府は東京に迫る人口と之れを凌ぐ商況を有し、この業績は決して順當とは言ひ難い。從つて今後發展の餘地を充分殘して居り、營業無盡が最も合理的なる、大衆金融機關として使命を發揚せねばならぬ事情にある。

同社は昭和六年十二月大なる抱負を以つて設立されたのである。僅かに三期の決算を濟ました計りであるから今日社業の成否を斷ずる事は困難であるが、將來に托される期待は大なるものがある。同社の所在は大阪市北區木幡町にして資本金十萬圓（內拂込高三萬圓）營業區域は大阪市の他三島郡、豐能郡である。

昭和七年下期の契約組數は四十四組、口數が一千八口、此の契約高は六十七萬五千五百圓、當期入金高五萬二千圓に對して當期給付高は三萬三千圓、從つて無盡給付資金は相當保留されて一萬三千五百餘圓、未拂無盡給付金が三千圓である。現金預ケ金勘定は一萬八千八百九十一圓餘になり、手許資金關係は充分の餘裕を示してゐる。同社は大阪式でつて、大阪式は新契約の當初は掛金剩餘が多いのと給付拒絕があるので資金關係の潤澤なるは當然であるが、あまり給付拒絕を高めると無盡利益金を少くし收支バランスを窮窟ならしめるから此の點充分考慮し、一方資金の運用を効果的にする必要があるのである。當期一萬八千八百九十圓の現金預ケ金の如きは同社の現狀を以つてすれば餘裕綽々たるもので、資金の運用といふ點より見て、もつと有價證券なり安全な貸付に振り向けてよくはないだらうか。

貸付金は當期六千三百六十八圓になつてゐるが、これを全部給付金限度貸付に向けてゐる。尤も同社は創業後日尙淺き爲止むを得ないかも知れぬが、將來拂込金限度貸付に主力を盡して轉換すべきである。未收無盡掛金は七百十六圓で、その全額が給付未濟口である。契約高に對して比率は一分强の低率になつてゐる。然し會の新しき間は未收掛金の少いのが通例であるから、最初から氣を緩める事なく、低率未收を將來も持續すべきである。

次に損益勘定であるが無盡利益金の少なきに先づ氣が付く、即ち二千八百六十七圓の僅少額で期末契約高六十七萬圓以上ある同社としてはその倍額の無盡利益金が擧がる筈である。勿論これは將來に具へて利益金の留保に努めてゐるためであらうことは推測出來る。解約手數料が五百六十圓計上されて居るのは創業新しい同社として戒心すべきことである。利息收入の百七十八圓でいさゝか低率に過ぎはしないか。資金の運用には深甚の考究を望む。諸經費の嵩つて居る事は積極的に進出しなければならぬ、創業當初としては止むを得ないが今少し收益の向上に努力すべきだと思ふ。然して當期損失金一萬八千三百六十三圓（內前期繰越金損金二千百九十六圓）を計上して之れを後期へ繰越してゐる。創業當初よりよい足蹟を殘して將來輝きある社礎を築かるゝやう切に希望して止まないのである。

同社昭和七年下期末の貸借對照表を示すに次の如くである。（單位圓）

資産		負債	
現金預ケ金	一八、八七一	未拂無盡給付金	三、〇〇〇
貸付金勘定	六、三六八	未拂入札差金	三一二
給付金限度貸	六、三六八	未拂解約返戻金	三五二
未收無盡掛金	七一六	無盡給付資金	一三、五三七
未濟口	七一六	假受金	一二二
假拂金	六七五	株主勘定	一〇〇、〇〇〇
營業用土地建物什器	一、七七〇	資本金	一〇〇、〇〇〇
雜	五四〇		
株主勘定	八八、三六三		
拂込未濟資本金	七〇、〇〇〇		
當期損失金	一八、三六五		
合計	一一七、三二三	合計	一一七、三二三

大阪産業無盡會社

〜〜社業は穩健着實〜〜

大阪府中河内郡盾津村所在の同社は資本金十萬圓（内拂込高二萬五千圓）營業區域は大阪府一圓にして設立は大正十一年四月である。

同社は所在地の關係にも依るであらうが創業以來華々しい業績を示したことなく業態依然たるものがあつたが最近は契約高も漸增し幾分活況を呈して來てゐる。契約高の多少の如き敢て言ふに足らず要は社業の堅不堅にあるが、營業してゐる以上はそれ相當の成績を擧ぐべきであらう。同社が歩一歩漸次契約高を增しつゝあるは欣しく、更らに一段の努力を以てせられんことを望む。

同社の契約高、未收高及其の比率の推移を示せば次の如くである。（單位千圓）

	契約高	未收高	率		契約高	未收高	率
大正十一年下期	二九二	不明	—	大正十二年下期	一、三〇三	不明	—
同十四年下期	一、九一三	三四	〇、〇一八	昭和二年上期	一、九〇三	九九	〇、〇五二
昭和三年上期	一、八〇〇	九七	〇、〇五四	同	四年上期	一、九〇六	一〇八	〇、〇六〇
同	五年上期	二、二三六	一〇五	〇、〇四七	同	六年上期	二、三〇五	一二九	〇、〇五三
同	六年下期	二、三七一	一二九	〇、〇五四	同	七年下期	二、六四五	一四八	〇、〇五六

同社は創業の翌年大正十二年には早くも三十萬餘圓の契約高を獲得し、其の後も毎期僅少づゝではあるが漸增を示し、七年下期には二百六十四萬五千圓の契約高に達してゐるのである。未收無盡掛金高は契約高の增加に連れて增加して來たが、その比率から見れば大した變化なく、常に四五分の未收率に喰止めてゐる。五分の未收率必ずしも低率とは言へないが財界不況時の今日先づ順當の成績である。

七年下期の契約組數は百七十五組、口數四千五百七十二口其の契約金額は二百六十四萬五千七百圓で當期新規契約高三十萬圓に對して當期滿期高は十萬九千二百圓である。當期入金高三十一萬六千圓に對して、當期給付高が十九萬四千八百餘圓であるところを見ると同社の給付拒絶も相當高率になつてゐるやうである。その結果は手許資金を著しく增加せしめ現金預ケ金は十五萬六千三百十三圓（六年下期十二萬一千圓）有價證券一萬九千三百七十五圓（六年下

期九千圓）になり、他方無盡給付資金は三十四萬八千四百五十圓、契約高の約一割三分に當つてゐる。資金關係は極めて圓滑であるが、運用方面には相當の考究がされねばなるまい。資金の固定は比較的少なく營業用土地建物什器に五千三百餘圓、所有動產不動產に九千百餘圓に過ぎない。しかも同社拂込資本金は僅かに二萬五千圓であるが諸積立金は五萬六千九百四十四圓の額になり、拂込資本金の倍額以上に達してゐる。貸付金の十三萬二千四百圓の內譯は不動產擔保貸付八萬三千餘圓、拂込金限度貸付は二萬七千餘圓、給付金限度貸付一萬六千餘圓不動產擔保貸付金に主力を置いてゐるのは固定し易い丈けに充分の戒心がされねばならぬ。未收無盡掛金十四萬八千三百餘圓は給付未濟口未收が三萬三千五百餘圓、給付濟口未收が十一萬四千七百餘圓である。給付濟口未收掛金に對しては極力銷却に努めてゐるのでこの方面の杞憂は少いと見るべきであらう。兎に角同社が契約高こそ少いが穩健着實な歩行を以てせかず焦らず歩一歩と社業の充實を計つてゐるので同社の將來には多分の期待が持たれる。

然し現在の同社としては現金預ケ金の保有が十五萬六千圓になつてゐるので、滿會給付金に惱むやうなことは決してないが、それ丈け運用を削かれてゐるので果して採算上どうであるか、この點に就ては今少しく精密なる研究がなされなくてはならぬのではないかと思ふ。

轉じて損益狀態を見るに利益金の一萬五千九百餘圓は契約高二百六十四萬五千餘圓の同社としては低率の方であるが、それは給付拒絶のために豫定の利益金が收められぬが爲めであり、その上無盡給付資金繰入を三千六百五十六圓計上してゐる程である。其他の經費にも大した無理はなく決算は先づ順當と言つてよい。

當期利益金の九千六百二十六圓（內前後繰越高六千三百十四圓）を諸積立金及法定準備金に二千五百圓、株主配當に八百七十五圓（年七分）殘餘を後期に繰越してゐるが堅實な處分振りである。更らに一段の飛躍を待望する。

大阪中央無盡會社

〜近年極めて順調〜

同社は大阪市天王寺區大道に所在し資本金五萬圓（內拂込金三萬五千圓）營業區域は大阪府一圓である。もと同社は朝日無盡株式會社と稱した。設立は大正五年三月で昭和五年社名改稱と共に重役の多くも變更を見た。同社の創業は同地方に於ては古い方であるが爾來あまり目覺しき業績を擧げず大正十四年下期の契約高百七萬一千圓は朝日無盡時代の最高の額であつて、其の後著しき減額を來して昭和四年上期末には僅か三十八萬四千圓の契約高となり、未收率も一割六分四厘と云ふ高率を示すに至つた。然し五年以降は漸次好轉して順調なる經過を見てゐるのである。

同社近年の契約高、未收高及比率の推移を示すに次の如くである。（單位千圓）

	契約高	未收高	率		契約高	未收高	率
大正十一年下期	六九三	不明	—	大正十二年下期	九八〇	不明	—
同十四年下期	一、〇七一	九九	〇、〇九三	昭和二 上期	八九四	九四	〇、一〇五
昭和三年上期	七六六	七三	〇、一〇〇	同 四年上期	三八四	六三	〇、一六四
同 五年上期	一〇	八	〇、〇八〇	同 六年上期	一、二五六	七	〇、〇〇六
同 六年下期	一、三一九	一三	〇、〇〇八	同 七年下期	一、八四〇	三一	〇、〇一七

右表の如くに昭和五年以前の朝日無盡時代に於ては逐期未收無盡掛金の激增を見て著しく社業の低下を來したのである。即ち大正十四年下期の契約高は百七萬圓、それが每期急減して昭和四年上期には三十八萬四千圓に激減し、未收率に於ても大正十四年下期既に九分三厘の高率であつたが、其の後更に著增して、昭和四年上期には一割六分四厘と云ふ破綻的な高率を示した。然るに昭和五年新重役の下に銳意社業の更生に努めて來た結果、其の翌年六月上期には一躍百二十五萬六千圓の契約高となり、其の後も期を逐ふて漸增し順調なる躍進振りを示して居る。未收無盡掛金も極めて低率で六年上期は六厘であり、其の後稍々上昇してゐるが、七年下期漸く一分七厘の低率で極めて好成績と云ふべきである。

斯くの如き狀態であるから同社の資金關係も極めて好轉し充分餘裕を示して居る。即ち七年下期同社の現金預ケ金

は十八萬一千八百餘圓を有し、未拂無盡給付金は僅か五千五百圓である。尤も無盡給付資金は三十萬七千二百餘圓の巨額になつてゐる。當分は滿會給付に追はれるやうなことはあるまいが、將來は相當の考慮と準備が拂はれなくてはなるまい。六年下期の入金高は二十三萬三千七百圓で同期給付高は十七萬八千圓であり、七年下期は入金高は二十八萬五千圓で給付高は十六萬一千圓である點から見ても同社の給付拒絕は決して少いものではない。從つて無盡給付資金は前年より二十四萬圓といふ激增になつてゐるのである他方貸付金も前年同期より八萬八千圓を增加して居り、從つて受入利息も三千圓以上を增し、資金の運用は比較的有利になつてゐる。十一萬一千圓の貸付金の內容は、不動產擔保貸六萬四千圓、拂込金限度貸四萬四千圓、給付金限度貸に三千圓になつてゐるからさしたる不安はないが、もつと拂込金限度貸付を擴張すべきではないかと思はれる。

未收掛金が三萬一千六百餘圓の僅少額にとまつてゐるのは何と言つても同社經營の强味である。

轉じて損益勘定を見るに、無盡利益金は前期と稍々同額で一萬九千九百圓になつてゐるが順當の額と云へやう。給付拒絕が可なり高率になつてゐるにも拘らず同社が無盡給付資金繰入をしないで濟んでゐるのは現在契約無盡の進行が新しいからであらうが、將來もかくありたい。利息收入金三千八百五十八圓は貸付金十一萬一千餘圓に對して決して好率ではないが前期に較べると好果を收めてゐる。損失勘定に於ては特筆すべき項目はないが諸經費は契約高に對して比較的嵩んでゐるやうであるが、當社が積極的飛躍時にある今日としては止むを得ない事であろう。

當期利益金五千八百七十三圓を法定準備金に六百圓、其の他積立金に一千圓、重役賞與金に二百八十圓、配當金に八百七十五圓、後期へ三千百十八圓を繰越すと云ふ利益金處分としては手堅い處分振りである。更生後まだ日が淺いので充分の成績を擧げることは出來てゐないが、同社の將來には多分の期待が持たれる。更らに一段の發展を希望してやまない。

大阪不動無盡會社

〜〜最近の飛躍顯著〜〜

同社は昭和三年十一月資本金二十萬圓（拂込高五萬圓）を以つて設立、東區瓦町に營業所を置き同市他三郡（北、中、南河內郡）を營業區域とし、大阪式無盡を經營してゐる。創設後幾春秋も經ないが、其の契約高は大阪府十七社中第六位を占めて居る。所謂五百萬圓以上の部である。

同社の創業以降の業績推移は次の如くである（單位千圓）

	契約高	未收高	率		契約高	未收高	率
昭和四年上期	一、三三六	一四	0.010	昭和五年上期	二、六三二	五六	0.020
同　六年上期	三、七四一	一二〇	0.031	同　六年下期	四、二五一	一四六	0.034
同　七年下期	五、〇〇四	二一七	0.043	同　八年上期	五、五四三	二七六	0.050

近くこゝ一年門の跡を辿つても、八年上期の契約高は前期より五十四萬圓を增加し、而かも未收率は七厘の上昇を見たに過ぎない。

同社の未收率四分三厘は同府平均率に接近し（平均は四分二厘）從つてその成績は中位といふ所である。同社は設立以來契約の累增頗る好調に進展し、未收無盡も又漸次遞下してゐるところに、同社の異常なる努力が潛んでゐる。兎も角大體に於て順調なる推移を辿つて來たことには疑ひない。近時契約の增加に伴ひ殊に同社も十期の決算を終へ滿期の到來を迎へたのであるが、一方大阪式の資金增加は給付拒絕と相應じて、爰に同樣資金運用の必要に迫られて來るのである。同社七年下期の無盡給付資金は六十三萬三千圓に過ぎなかつたが、八年上期には實に一躍九十四萬八千圓になり、三十一萬五千圓の激增を示してゐる。然して同社の未拂無盡給付金は、七年も八年も皆無になつてゐる之れは給付拒絕による一つの反映とも見るべく、從つて無盡給付資金は悉く未拂無盡給付金といつてもよい位である それ故にこそ資金運用で拒絕の損失を補ふことが急務中の急務であり、同社も又此點に着眼し前記給付資金の激增と共に、俄かに貸付金に運用の途を求め、前期に比し五萬四千圓の貸付增加を見るに至つた。其の他現金預ケ金に於て二十七萬三千圓、有價證券一萬一千圓等何れも增加を見て

ゐる。同社の半期給付高は六年下期三十四萬五千圓、七年同期三十七萬九千圓で月割六萬圓見當であるから、現金預ケ金として五十萬圓以上を保有することは聊か過大の觀がある。少くとも四萬九千圓に過ぎない有價證券を增加するか、又は更に貸付運用に努力すべきであらう。大阪式經營の無盡會社に於ては、やゝもすれば資金の潤澤なるに氣を許してか放漫なる貸付又は不生產的の使途に流出することが多い。又其の諸經費にしても同樣放漫に流れ易い傾向がある。始めの一と足遂ひには千里の諺もある通り、經營者は此の資金の處理如何で或は浮び、又は沈むの結果を招くこと多いのでの愼重を要するのである。

同社貸付金の內譯は不動產に十四萬四千圓、半ばを割き之を前期に比較すれば二萬九千圓の增加を見てゐるのである。不動產擔保必ずしも否とするのではないが、其固定する點、評價の困難なる點、不況に對する値下り、處分困難等の諸事由により長期資金の他は成るべく避くることが通則とされてゐる。殊に無盡の如きは一朝給付の必要に際會し、急に換金しやうとしても到底敏速なるを得ない放資物は、極力之れを避くるに如くはない。比の點よりすれば限度貸付に於ては早晩給付に依り決濟が付くものであるから極めて便利確實といふべく、從つて貸付先は成るべく限度貸付に開拓されることが適當である。同社の貸付利息は六年下期九分一厘、七年同期七分四厘、先づ平均八分見當であつて之れを先輩會社の攝津、關西商工等と比較する時運用率の稍低いことを看取される。或ひは不良貸付の混入するのではないかとの疑ひが起る。

同社には解約率稍多きの感がある。即ち未拂解約返戻金は當期末九萬二千九百圓を有し、解約手數料收入は三千五百七十二圓の巨數を計上してゐるのにも徵することが出來る。從つて之れが補缺並に新規契約に對しては一段の留意をなすべきである。次に同社の利益金組入れは相當考究されて、之れを攝津、關西商工等に比較すれば、餘程內輪にして、資金留保に心を致してゐるものゝ如く、殊に同社は前年同期に比し資金著しく增大せるにも拘らず、却つて無

盡利益金は減じてゐる。其の留意の跡を筆者は誠に欣しく見るものである。即ち同社の前年八千九百九十九圓の無盡給付資金繰入れが當期は二百九十六圓に減じてゐる。資金潤澤の同社に於て給付資金に不足を生ずることは、容易に想像し難い所であるから、等しく今後の給付資金準備の爲め一種の銷却方法を採用したものと思はれるが、同社は他社の例に反し未收無金の銷却を怠つてゐるやうである。既に冒頭にも述べた樣に同社の未收は五分の低位で比較的好績だとはいへ、兎に角二十七萬六千圓に達し而かも其六割八分は給付濟口未收に屬することは、等しく憂ふべき現象であり、之れが銷却には相當の努力を注ぐ要を認めるものである。要するに同社は設立以來の健闘よく酬ひられ、頗る順境の發展を遂げ來つたことは之れを認め得るけれども內容の充實味に於ては未だ前記先輩會社に及ばざるものがある。殊に資金運用の途に就いては今一段の研究努力を要するものと見る。終りに同社の利益金處分は、當期利益金の約半ばを社外に放出し同期も年六分の配當をしてゐる。

尤も同社の拂込は五萬圓であるから、半期千五百圓に過ぎないもので云爲するには足らないが、社內留保を少しでも多くして、猶ほ二三期の經過を見るが賢明と思はざるを得ない。池永專務、木原常務の今一段の努力と同社の發展を希望してやまぬ。同社貸借對照表六、七年の比較を示せば左の如くである。（單位千圓）

資産	八年上	七年下	負債	八年上	七年下
現金預ヶ金	五七六	三〇三	未拂無盡給付金	〇	〇
有價證券	四九	三八	未拂入札差金	六	四
貸付金	二八四	二三〇	未拂解約返戻金	九二	九三
有價證券擔保 不動產擔保	三	三	無盡給付資金	九四八	六三三
拂込金限度	一四四	一一五	假受金	一一	一〇
給付金限度	八八	七四	雜	九三	七
未收無盡掛金	四七	三八	株主勘定	二〇六	二〇五
未濟口	二七六	二一七	資本金	二〇〇	二〇〇
濟口		七一	諸積立金	三	二
假拂金		一四五	當期利益金	三	三
營業用土地建物什器	七	六			
雜	三	一			
拂込未濟資本金	一五〇	一五〇			
計	一、三六〇	九五四	計	一、三六〇	九五四

大阪無盡株式會社

〜〜發展の途順調〜〜

同社は大正五年四月の設立にかゝり、同地所在會社中でも古き方である。大阪府に於ける營業無盡の發展は比較的近年に屬し、大正十一年には府下所在の會社は十社であり其の總契約高は千二百五十萬圓で一社に當平均は僅か百二十萬圓に過ぎなかつたのである。然るに昭和に入つてからそれも殊に近年になつて、大阪勸業、大阪共榮、大阪不動堺產業等が設立されて頓に活氣を帶び、現在では社數も十七になり、其の總契約高（七年下期末）七千七百四十萬五千圓を有し、全國中でも東京に次ぐ契約高である。尤も第二位とはいふものゝ東京府の總契約高二億九千九百萬圓に對して漸く約四分の一にしか當らない。人口に於てこそ劣るが商工業地としての殷盛は遙かに東京を凌駕する大都市大阪に於てはまだ〳〵發展の餘地が充分に殘されてゐる。

同社は營業所を大阪市西區北堀江通に置き資本金六萬圓（全額拂込濟）營業區域は大阪府一圓である。同社は營業經歷も古いが業績も順調なる經過を辿り、近年は殊に進展著しきものがある。同社重役諸君の不斷の努力が酬ひられてゐるのである。

同社近年の契約高、未收高及比率の推移を示せば次の如くである。（單位千圓）

	契約高	未收高	率		契約高	未收高	率
大正十一年下期	二、二六〇	不明	—	大正十二年下期	二、五七七	不明	—
同 十四年下期	三、三六六	一七九	〇、〇五三	昭和二年上期	三、四一五	一四八	〇、〇四四
昭和三年上期	三、五一九	一四五	〇、〇四一	同 四年上期	四、一七八	一四三	〇、〇三四
同 五年上期	四、七八八	二一三	〇、〇四四	同 六年上期	五、一〇一	二四五	〇、〇四八
同 六年下期	五、一六五	二一六	〇、〇四二	同 七年下期	五、八七八	二三一	〇、〇三九

多くの會社が一進一退ムラのある業績を示して居るのであるが、同社は一進又一進、期を逐ふて好轉し順調なる躍進を遂げてゐるのである。即ち大正十一年下期は契約高二百二十八萬圓であつたが同十四年下期には三百萬圓を突破し、昭和四年上期は四百萬圓臺に上り、更らに六年上期には五百萬圓を越へ、七年下期五百八十七萬八千圓に達した

のである。未收率も大正十四年下期には五分三厘であつたものが其の後低減して四分内外の未收率にとゞめ、七年下期には三分九厘の低率を示すに至つたものである。

近年全國會社の業績は漸次低下しつゝあるが、それにも拘らず、健闘よく今日の業績を維持し得てゐるといふことは、わが業界の爲めにも欣ばしい。同社の諸績立金は資本金の倍額十二萬圓以上になり、資金關係も綽々たる餘裕を示してゐる。六年下期の現金預ケ金は十五萬四千圓であつたものが、七年下期は十萬一千圓を増して二十五萬五千餘圓になつた。これは七年下期の入金高が四十六萬四千圓だつたのに當期給付高は三十八萬八千圓に過ぎなかつたからで、其の結果無盡給付資金は三十九萬五千圓が七年下期五十五萬九千圓に著増した。然して未拂無盡給付金は僅かに一千圓の僅少額で給付金の支拂は迅速圓滑に行つてゐることが判る。今後は滿會給付金が相當額に上るであらうから二十萬圓程度の現金預ケ金は保有しておかなくてはなるまいが、今少し有利に運用されてもよくはないかと思惟される。未拂解約及給付未濟口未收掛金の金額から見ても相當解約率は高いやうだが、この補充には餘程の努力が拂はれなくてはなるまい。營業用土地建物什器五萬二千三百餘圓の他に所有不動産が一萬三千二百餘圓計上されてゐるが、この程度のものは財界不況時の今日やむを得まい。

同社の貸付金は二十六萬圓になつてゐるが、其の内半額以上が拂込限度貸付金であることは賢明なるやり方である其の利息收入も當期は一萬八千六百六十七圓の利息金を受入れてゐる。二十三萬一千圓の未收無盡掛金は、未濟口未收掛金が解約に依つて整理されてゐるので、大部分は濟口未收掛金になつてゐる。

轉じて利益勘定を見るに、無盡利益は給付金契約高五百八十七萬八千圓に對して五萬六千百九十三圓を擧げてゐるから好率の無盡利益になつてゐるが、同社は期限到達に依つて豫定の無盡利益を組入れてゐるのではないかと思ふ。給付確定に依て組入るゝは勿論相當留保に努めるやうにしなくては後日收支の基礎を破壞することになりはしないか

と思はれる。從つて同社の無盡給付資金繰入は二萬二千四百圓を計上するの止むなきに至つてゐる。この點に就ては充分の考究が拂はれたい。即ち同社の掛金表を以てすれば給付拒絶があるのは當然であり、給付拒絶は同社の給付資金を加重せしめてゐるが、それだけ無盡利益金を減少せしめ、當期二萬二千圓、前期一萬九千圓以上の無盡給付資金繰入れをしてゐる。然して運用利益は一萬八千圓であるから結局給付資金繰入の方が四千圓から運用利益を超過してゐるのである。それ丈け收支關係を窮窟にするのは免れ得ないことである。從つて給付拒絶を少くして成るべく無盡利益金を豫定利益に近からしむるやう努めた方が有利ではないかと思ふのである。

未收無盡掛金銷却には特に留意し當期も一萬圓六年上期は一萬四千餘圓を計上してゐるのは欣しい。當期利益金一萬十七圓（内前期繰越金千四十四圓）の處分を法定準備金に一千圓、其他積立金に二千圓、重役賞與金二千圓、配當金三千圓（年一割）殘額二千十七圓を後期へ繰越してゐるのはなか〳〵手堅い處分振りである。

今後の飛躍を期待して筆を擱く。同社の昭和七年下期の貸借對照表を左に示さん。（單位圓）

資産			負債		
現金預ケ金勘定	二五五、四三三		未拂無盡給付金		一、〇〇〇
有價證券勘定		〇	未拂入札差金		二三、〇一〇
貸付金勘定	二六〇、六七七		未拂解約返戻金		五三、四九六
有價證券擔保		〇	無盡給付資金		五五九、二七五
不動産擔保	四八、九一八		假受金		一、四〇〇
拂込金限度	一三一、四〇一		雜		六七六
給付金限度	八〇、三五八		株主勘定		一〇九、六八七
未收無盡掛金	二三一、一六八		資本金		六〇、〇〇〇
未濟口	三六、六八九		諸積立金		一二〇、六七〇
濟口	一九四、四七九		當期利益金		一〇、〇一七
代理店貸		〇			
假拂金		二、〇九七			
營業用土地建物什器	五二、三〇六				
所有動産不動産		一三、二六八			
雜		五、五九五			
株主勘定		〇			
拂込未濟資本金		〇			
合計	八二九、五四四		合計		八二九、五四四

關西商工無盡會社

～～内容極めて充實～～

同社は大正十四年資本金三十萬圓（内拂込高七萬五千圓）を以て大阪市東區内本町に設立、純大阪式を以て無盡經營を開始した。營業區域は大阪市の他堺市、中河内郡、三島郡、豐能郡、泉北郡の一市五郡、尤も今日では大大阪の擴張で新市内に併合された地域が少くない。舊大阪市七社中大正年代の末期に設立された二社の一である。大正十四年には同府に三社の設立を見、八月同社、九月大一、十月和泉といふ順序であるが、契約高から見れば同社が隨一、未收狀況も斷然他を拔いてゐる。七年下期の數字を示せば左の如し。（單位千圓）

	契約高	未收高	比率
關西商工	五、九六三	一〇八	●〇一八
大一	一、四八五	七九	●〇五三
和泉	五九九	六二	●一〇三

同社は舊市部七社の中に於て契約高は第三位に位し、未收比率も極めて良好の地位にある。かの社業堅實と稱せられてゐる攝津無盡すら、契約高と未收無盡掛金との比率は二分八厘であるが、同社は實に一分八厘に過ぎない。尤も大阪中央の一分六厘、浪花の一分四厘、大阪勸業の一分があるが、之れ等は比較的契約高の少い會社に屬してゐる。

同社は大阪式當然の結果として給付拒絶は逐期高率になつて來てゐる。從つて等しくこの剩餘遊資を最も有利に運用して行くことが、殆んど課せられた唯一の任務と云つてよい。同社は此の點には實に細心周到の留意を配し、隨所此の方針より出發し、苟くも違はざらんことに努めてゐる趣が看取される。

例へば餘裕資金を以て、成るべく未拂勘定の支拂決濟に努め、利益金を割いては將來資金の準備を豊潤ならしむるに努め、一面消極的防止策、充實策として未收無盡掛金を初め、諸銷却に精進する等みな然らざるはない。而かも此の方針は着々好果を收め、未拂無盡給付金は前年同期に比し五萬三千圓を減じ、僅かに三千五百圓になり、未拂入札

差金も五百餘圓、未拂解約返戻金も千四百餘圓を減じてゐる。而して同社の貸付金に對する方面は最も主力を傾注するところで、毎期若干の增加を示し、且つ其の動きも相當活潑で努めて固定を避けてゐるやうに見られる。同期貸付金三十三萬五千圓の中不動産擔保貸は二萬六千九十圓、僅かに總額の七分六厘を割いたのみで、他は悉く限度貸付に振り向けてゐる。然して其の内譯は拂込金限度貸付二十一萬圓、給付金限度貸付九萬七千圓になつてゐる。この比率も頗る順に從つたものといふべきである。しかも利息收入は年一割一二分に廻り、低金利時の今日極めて好績と言はねばならぬ。

同社の給付額を見るに六年上期に於ては六十六萬五千八百圓、七年同期五十三萬五千三百圓、平均半期六十萬圓になり、其の月平均額は十萬圓見當である。之れに對し支拂準備としては七年下期現金預ケ金二十二萬三千餘圓、有價證券四萬三千餘圓、貸付金三十三萬五千餘圓があり、實に綽々たる餘裕を示してゐる。

故に同社としては其の餘裕資金の運用に於て、給付拒絶による未濟口掛金の差損を塡補すれば、爰に極めて完全なる豫定收支計算上の利益を得べく、若し其の差損を超過すればそれ丈け利益が增大するわけである。

同社と攝津無盡とは業績誠に近似し、その内容充實の點並に其の方針に於ても極めて相通ずるものあることを見逃せない。恐らく同社は先輩會社たる攝津無盡を凌駕せんとすることが、隱れたる一の抱負ではあるまいかとさへ思はれる。然し競爭といへば互に商賣敵の如き惡い觀念を聯想されるが、既に時代は統制經濟の期に進み、業界の向上、聯絡、親睦は最早昔日の秘密孤城主義を打開し、競爭は即ち琢磨であり、向上であり、共榮であり、共存であることになつてゐる。爰に右兩社を比較する時に幾多の興味を見出すのである。同社は既に契約高に於て攝津無盡を凌駕すること三千圓、未收無盡掛金の少きこと五萬九千圓即ち一分の低率を示してゐる（七年下期）何と言つても未收無盡掛金が少なく、充分に資金の運用が出來てゐることは同社

經營上の大きな强味である。

然して同社は當期純益金一萬六百二十五圓（前期繰越金三千五百三十五圓）を擧げ、これを法定積立金一千圓、其他諸積立金一千五百圓、重役賞與金一千四百圓、配當金、（年八分）三千圓、殘額の三千七百二十五圓を後期に繰越してゐる。極めて手堅い處分振りである。

眞摯な研究家中川元氏を常任監査役とし、專務三木氏又非常なる業務熱心家である。殊に最近大阪は軍需工業の好響を受け頓に財界は好調に復しつゝありときく、しかして同地の各社は新規契約に集金に目覺しき收果を擧げてゐるのである。同社の如き將來益々發展を遂げ、しかも業礎の堅實、營業無盡の聲價を高からしむるに貢獻すること大なるものがあらうと思はれる。

殊に大阪の營業無盡は近時新設會社相踵ぎ、著しく進展しつゝあるが、まだ發展の餘地は充分に殘されてゐる。借すに幾年の歲月を以つてすれば同地の營業無盡は素晴しき發展を遂げるであらう。從つて同社の將來には多大の期待が持たれる。

最後に更らに一般の健闘を切望して擱筆する。

同社の昭和七年下期の貸借對照表を示せば左の如くである。（單位圓）

資産		負債	
現金預ケ金勘定	三二三、七七〇	未拂無盡給付金	三、五〇〇
有價證券勘定	四三、五三〇	未拂入札差金	一、五一六
貸付金勘定	三三五、三五一	未拂解約返戻金	八、六八九
有價證券擔保	三〇〇	無盡給付資金	八二一、七九五
不動産擔保	二六、六九〇	假受金	二七、六九四
拂込金限度	二一〇、八六一	雜	六、五〇五
給付金限度	九七、五〇〇	株主勘定	三三八、七二五
未收無盡掛金	一〇八、五七二	資本金	三〇〇、〇〇〇
未濟口	四六、七八〇	諸積立金	二八、一〇〇
濟口	六一、七九二	當期利益金	一〇、六二五
代理店貸	〇		
假拂金	四、二〇九		
營業用土地建物什器	五、一六八		
所有動産不動産	一五五、一〇〇		
雜	七七二〇		
株主勘定	二二五、〇〇〇		
拂込未濟資本金	二二五、〇〇〇		
合計	一、二〇八、四二四	合計	一、二〇八、〇二四

金剛無盡株式會社

～～經過極めて順調～～

大阪府南河内郡富田林町に營業所を有する同社は、大正五年四月設立、資本金五萬圓（内拂込金二萬圓）一出張所五代理店を有する。契約高は昭和七年下期四百九十七萬圓同府下十七社中斷然他をリードして居る二千萬圓以上の交野無盡を除き、第七位先づ中堅どころの地位にあるものと云へる。因に同府下一社平均の契約高は同期四百八十三萬七千圓になつてゐる。

同社の過程は契約漸進の趨勢を辿り毎期若干の成長を遂げて來たが、未收無盡掛金は初期二分四厘程度の低位から之れ又次第に上昇の勢を示すに至つた。即ち昭和二年頃から同五年上期迄は、四五分の間にあつたが六年上期五分五厘となり、爾來契約の增加に正比例して七年下期には六分五厘になつた。八年下期に於ける契約高は今明からでないが、各年三十四五萬圓程度の增加から推して恐らく五百三十萬圓位なるべく、之れに對し未收無盡掛金二十七萬四千圓、即ち五分見當に見直して來た譯である。同社近年の對比表は左の如くである。（單位千圓）

	契約高	未收高		契約高	未收高
大正十二年下期	一、一五一	—	大正十四年下期	一、五七二	三九
昭和二年上期	二、二二八	二一〇	昭和三年上期	二、五四八	一三六
同四年上期	三、〇一六	一四五	同五年上期	四、一〇九	一七七
同六年上期	四、四二四	二四七	同六年下期	四、六〇三	二六七
同七年下期	四、九七〇	三三六	同八年下期	五、三一〇	二七四

即ち八年下期に於ては未收無盡掛金上昇の傾向から脫し契約高は增進したにも拘らず却つて前年より一分五厘方の回復を示した所に、同社の努力と改善の跡が窺はれる。しかし府下十七社の未收率の平均は四分二厘（七年下期調）を示してゐるから、同社は更らに一段の努力を必要とすることは論を俟たない。殊に同社の未收無盡掛金の内譯は從來給付濟口が其八割三分を占むるといふ、憂ふべき實情を有して居るだけ尙更ら之れが回收には全力を傾ける要があらう。同社八年下期の未拂無盡給付金は三萬七千四百圓と前年に比し一萬七千八百圓減になつてゐる。蓋し同社も大

阪式掛金である爲め給付拒絶の逢着は免れないであらう。然らば無盡給付資金は如何かといふに、同期五十二萬四千餘圓になり、契約高との比率は約一割に當り、決して僅少なりとは云ひ難い。

現に六年下期の給付濟高は四十二萬九千圓、七年下期には五十一萬七千圓を示してゐる。滿會組數、契約增加率の如何に依つて、各期の支拂高豫定は略ぼ豫見し得るを以て之れに應ずるの資金準備は是非怠つてはならぬ。同社は又毎期無盡利益金から常に給付資金繰入を行つて之れを補つてゐる。同期の未拂勘定は入札差金、解約返戻金を加へ十六萬八千餘圓、之に對して現金預ケ金三十七萬四千圓、貸付金九萬二千餘圓に依つても同社の資金關係は實に餘裕綽々たるものが判るのである。假りに滿會給付金があつても決してこれに惱むが如きことはあるまい。しかし給付拒絶の結果から來る掛金差損の塡補、即ち無盡利益金の社內留保と資金運用には充分の努力を拂はねばならぬ。

同社の貸付金九萬二千圓の中五割六分は之れを不動產に固定し、拂込限度には三割、給付金限度には二割の貸付をしてゐるに過ぎない。尤も六年下期に一萬一千圓、七年下期に一萬三千圓の給付金限度貸付があつたものが、八年下期に僅かに二千九百圓に減じたのは、給付相殺に依つて回收が付いたものと思はれる。掛金差損の塡補方法としてはどうしても貸付金によるの他なく、而してその種目は限度貸付に依るの勝れるに如かない。利息の誘惑に惹れ不動產貸付に偏重することは免れ難き人情の弱點なると、一は情實關係の依賴に打勝てぬ等のこともあり勝であるが、之は啻に固定を餘儀なくされて急場の間に合はないのみならずやゝもすれば處分損其他の失を免れない。今少しく手許資金は有利に運用されていゝやうである。同社八年下期の損益計算が手許になきため、利息計算を見難いが七年下期の對照によれば年率五分五厘（六年下期は七分五厘）と、可なり不良債權の伏在を想像させるものがある。限度貸付ならば結局給付相殺の可能は明瞭であり、絶對回收不能の虞れなき强味を有する。但し給付金限度に至つては未經過掛

金に對する見返擔保の必要なことといふ迄もない。不良の貸付を爲し之れが銷却に努める如きは、銷却其のことは嘉すべしとするも極めて拙策といはねばならない。同社も七年下期から貸付金銷却を始め、八百五十圓の銷却をしてゐる既に回收見込を失つた以上はもとから銷却を必要とすべきも、其の當初の選擇及び調査は彌が上にも愼重を極めなければならない。

次に同社の利益金中解約手數料收入は六年下期、七年下期共に七千圓に近き數を擧げて居る。之れを假りに千圓會に換算して見ると一口二十圓とすれば三百五十口に該當し三十口一團のもの百十六團に相當する。之れを一月平均にして約二團の解約を見ることになる。斯の如く多數の解約は忽ち缺口となり、之が補缺容易でなく、特に大阪式無盡に於ては豫定收支計算に莫大なる齟齬を來すことになる。若し又補充がつかず、缺口の儘終回迄据置く場合は、掛金差損負擔は一の重壓となつて現はれるであらう。契約高二千八十八萬圓を有する交野無盡が、同期の解約手數料千八百三十二圓なるに對比して、多大の懸隔あるのである。解約の多いのは畢竟加入選擇の粗漏に依る處が多い。十分の考究を促して置く。利益金及處分案は知るに由ないが、恐らく五分配當据置であらうと思ふ。五分としても同社は僅に五百圓に過ぎない。未收銷却、資金繰入れ何れも前期よりも增してゐると思はれるが、切に同社の努力を以て只管內容の充實に精進あらんことを希望する。同社第三十六期の貸借對照表は左の如くである。（單位圓）

資產		負債	
現金預ケ金勘定	三七四、八一一	未拂無盡給付金	三七、四七〇
有價證券勘定	三七五	未拂入札差金	三七、三五九
貸付金勘定	九二、五九八	未拂解約返戻金	九三、六六四
未收無盡掛金	二七四、二〇五	無盡給付資金	五二四、五二二
代理店假勘定	二、六七六	未經過無盡掛金	一、八五五
集金人假勘定	二七	假受金	六五五
假拂金	一、六五三	擔保保證金	四、九九四
動產不動產	三一、〇四二	使用人積立金	五、七二一
株主勘定	三〇、〇〇〇	株主勘定	一〇一、〇六六
合計	八〇七、四一〇	合計	八〇七、四一〇

交野無盡金融會社

〜〜飛躍的好績を持續〜〜

大阪府北河內郡交野村所在の同社は合資會社として大正三年八月設立され、その後大正十一年十一月資本金二十萬圓の株式會社に組織變更したのである。更に昭和三年十月には資本金を現在の五十萬圓(拂込高二十七萬五千圓)に增資した。經營無盡は大阪式、營業區域は大阪府一圓で現に五ヶ所の支店と一ヶ所の出張所を持ち、斷然他の追隨を宥さぬ活發なる業績をつゞけてゐる。

大阪は經濟的に東京よりも優位にあるが、無盡界は振はなかつた。最近に於てこそ新進各社の擡頭躍進に刺戟され著しく契約も增しつゝあるが昭和五年上期迄は同社を除く十三社の一社當りの契約高は漸く三百三十萬圓といふ數字に過ぎなかつた。

同社が目覺しき進展を遂げるに至つたのは昭和四、五年頃からで五年上期には既に一千五百八十四萬九千圓といふ額に達したのである。最近では殆んど毎期二、三百圓以上の新規契約高を獲得してゐる。八年上期に於ても新規契約高は百二十九組、この契約高三百八萬七千圓、七年下期よりも組數四十七、契約高百三十四萬一千圓の增加になつてゐる。他方滿會無盡は四十四組二百十萬八千圓、差引純增加口數千二十一、組數八十五、契約高百九萬八千圓になり當期末現在高は實に二千百九十七萬九千圓といふ膨大なる巨額に達するに至つた。

いま同社最近の契約高及未收掛金の推移を示せば左の如くである。(單位千圓)

	契約高	未收高	率		契約高	未收高	率
大正十一年下期	九〇八	—		大正十二年下期	四、九三三	—	
同 十四年下期	六、一九四	二九	〇、〇〇四	昭和二年上期	七、三六二	九九	〇、〇一三
昭和三年上期	八、九四三	七七	〇、〇〇八	同 四年上期	一一、六二一	九九	〇、〇〇八
同 五年上期	一五、八四九	一五七	〇、〇〇九	同 六年上期	一八、六八八	二六九	〇、〇一四
同 六年下期	一九、一〇八	三〇六	〇、〇一六	同 七年上期	二〇、八八〇	四〇九	〇、〇一九
同 八年上期	二一、九七九	四五三	〇、〇二〇				

株式組織に變更した直後大正十一年末には漸く九十萬九千圓であつた契約高が、昭和二年には七百三十六萬二千圓

になり、四年上期には遂ひに一千萬圓を突破して一千六百十二萬一千圓、その後も引續き著しく增加率を高め八年上期には二千百九十七萬九千圓、全國無盡會社中に於ても五指に加へられる業績を示すに至つた。

他方同社の未收無盡は極めて少なく昭和五年上期迄は契約高一千五百八十四萬九千圓に對して一分以下の九萬九千圓といふ驚異的僅少額で、その後漸增したとは言へ六年上期一分四厘、同年下期一分六厘、七年下期一分九厘、九年上期は未收無盡掛金四十五萬三千圓になり、二分に昂騰したが、それでも全國的に未收無盡掛金の著增に惱みつゝある時、同社が二分といふ低率にとめてゐるのは偉とするに足りる。同社がかくの如く他社を壓して斷然優位を維持し目覺しき發展を遂ぐることが出來たのは、內部的には金澤社長を中心とする家族主義を標榜し、外部的には加入者本位を信條として、殊に特別配當金交付制度を設け又親切部を特設して加入者の日常生活上諸種の相談相手になる等加入者本位の經營方針を具體化するに極力努力して來た結果に外ならぬ。

次に同社の資產勘定の移動を調べて見やう。(單位圓)

	五年上期	六年上期	八年上期
現金	五六、五三六	四四、二二五	五〇、七一三
銀行預金	九三三、五六〇	九二八、六四四	一、九六一、一二五
郵便貯金	七四〇	八九〇	八八〇
有價證券	一〇一、六五九	六八、七五四	三三、一六〇
有價證券擔保貸付	二二、〇〇八	一七、四六四	一〇、八六八
不動產擔保貸付	五六五、三七六	六三二、六七七	五三五、四九八
拂込限度貸付	四一九、七三九	六五一、七八九	八三〇、〇三八
給付金限度貸付	—	—	八九、二四三
未收無盡掛金	一五七、三三〇	二六九、三二二	四五三、六一二
假拂金	二七、四三一	一三七、九五二	一四、七八四
入札差金立替金	—	—	二三、六三〇
營業用土地建物	一八六、二〇一	二一六、四六一	二八一、九六一
所有動產不動產	三七、五一四	九五、一五四	二九三、三二三
拂込未濟資本金	二三五、〇〇〇	二三五、〇〇〇	二三五、〇〇〇
合計	二、七三九、一八七	三、二八五、三八七	五、一〇三、九三〇

右表を見て先づ第一に氣付くことは、銀行預金の激增である。即ち六年上期迄は九十二萬八千圓であつたものが、八年上期には實に百九十六萬一千圓といふ巨額になつてゐ

る。倍額以上の増加である。之れは同社の無盡給付資金が三百五十七萬四千圓といふ額になつたからであるが、かくの如き莫大なる巨額の銀行預金を擁してゐることは採算上不利益なことは言ふ迄もなく同社が如何に適當の投資對象物がなく資金運用に惱みつゝあるかゞ窺知出來る。この點に就ては同社も深甚の考慮を拂ひ掛金表の改正に依つて緩和せんと努力してゐるので遠からず改善されやうと思ふが同社の無盡中には經過の新しいものが相當額になつてゐるのでこの傾向は當分繼續されると思はねばならぬ。從つて資金運用には極めて愼重なる研究が遂げられなくてはならない貸付金は六年上期と總額に於て大差ないが、不動産擔保貸付金が減じ、拂込金限度貸付金が十七萬九千圓增の八十三萬圓になり、五年上期に較べると殆んど倍額に激增してゐる。蓋し安全なる點に於てこれに勝るものなく同社經營者の經營態度が窺れて欣しい。所有不動産が六年上期に比すと約七倍の二十九萬三千圓に增加してゐるのは、財界不況の今日やむを得ぬことには違ひないが考究の餘地があるやうである。

有價證券の三十三萬三千圓（六年上期は僅かに六萬八千圓）は資金運用に惱み且つ適當の對象物なき同社としてはこの方面に運用の途を求むるは當然のことであり、しかも有價證券利息及配當七千圓、增加益一萬四千圓計二萬三千圓（年利一割三分八厘）の收益を擧げて好績を示してゐる

更らに轉じて負債勘定を見るに左の如し。（單位圓）

	五年上期	六年上期	八年上期
未拂無盡給付金	八二、〇一九	一四七、七五四	二五一、五〇〇
未拂入札差金	一九八、七四八	二八九、七四一	三二七、七九六
未拂解約返戻金	三九三	二、五七）	三、二五三
無盡給付資金	一、六三一、〇四八	一、九三二、一一五	三、五七四、二〇九
假受金	一〇八、五九八	二九、七六〇	二〇七、六二四
社員積立金	二三、八六四	一五、五四一	二二、一一九
資本金	五〇〇、〇〇〇	五〇〇、〇〇〇	五〇〇、〇〇〇
法定準備金	二九、五〇〇	四一、五〇〇	六〇、五〇〇
別途積立金	八九、〇〇〇	一三九、〇〇〇	七二、五〇〇
社員退職給與基金	二三、八九五	二〇、五二六	二九、八〇三
加入者特別配當準備金	四、三七四	一一、五二五	一六、九四一
當期利益金	六八、七四六	六五、三一九	三八、六二九
合計	二、七三九、一八	三、二八五、三八七	五、一〇三、九三〇

右表の如く同社の無盡給付資金は六年上期當時の百九十二萬二千圓が僅かに二ヶ年間で三百五十七萬四千圓になりまさに百六十五萬二千圓の增加である。これは無盡の經過進行と共に給付拒絶が漸次高率になつて來た爲めであり、當分はこの傾向を持續すると見なくてはならぬのでこゝ數期間には更らに莫大な金額になるのではないかと思惟される。從つて萬全を期する對策を今日から充分に講じておかなくては愈々遊金の加重に惱む結果になりはしないかと思ふ。賢明なる同社重役諸君のことであるからこの點に關しては遺憾なく考究が遂げられてゐることゝ信ずる。

同社の入札差金は給付の際支拂ふことになつてゐるので前期は三十二萬七千圓の多額になつてゐる。これは無利息の金であるから三十二萬七千圓の運用は假りに銀行預金の利息にしても相當のものである。未拂無盡給付金の二十五萬五千圓は兩三年前頃に比較すると數倍の額になつてゐるが、同社の給付確定高は半期二百二十三萬七千圓に達し、月平均約三十七萬三千圓からになつてゐるのでこの程度の金額は當然のことであろう。

さらに進んで損益を見るに無盡利益は十二萬五千圓、貸付金利息六萬七千圓、預ケ金利息三萬六千圓等計二十八萬一千圓になつてゐる。無盡利益が六年上期の十六萬九千圓よりも四萬四千圓減じてゐるのは同社が堅實方針を執り無盡利益の留保に努めてゐる結果であらう。貸付金の受入利息の利廻りから推測しても同社貸付の內容は極めて充實してゐると見られる。然し無盡給付資金繰入が遂期著增し四萬一千圓になつてゐるのは給付拒絶が少からぬ額になつてゐるので免れぬことではあるが、同社にとつては恐らく最大の惱みかと思れる。この意味に於ても同社が無盡利益の組入に留意し留保することに努めてゐるのは欣しきことである。無盡利益の減少は當期利益に影響して、每期六萬圓以上の當期利益金を計上してゐたが、前期は三萬八千圓に減じた。然し決算には綽々たる餘裕を見せてゐる。

諸銷却には特に意を用ひ每期充分に行ひ、前期は未收掛金の三萬一千圓他計四萬八千圓といふ額になつてゐる。

堺産業無盡會社

〜〜業績著しく好轉〜〜

同社は昭和四年四月の創立にして前期第八回の決算を終つたばかりの新進會社である、所在地は堺市錦之町、資本金は十萬圓の內拂込高二萬五千圓である。

同社は創業以來積極方針を執り、短期間に於て目覺しき發展を遂げたが、新規契約に焦ることに急にしてその結果は急激なる未收無盡掛金の增加を招來し、その前途を甚しく不安のものにしたのであるが、その後募集政策を變更し量より質を選び募集嚴選主義の下に專念業績の向上と充實を計つて來たために面目全く一新することが出來た。

同社創業以來の契約高の推移は左の如し。(單位圓)

昭和五年上期末	二、八九六、六〇〇	昭和六年上期末	四、二六一、六〇〇
同　六年下期末	四、一九二、九〇〇	同　七年下期末	三、九一七、五〇〇
同　八年上期末	四、〇三八、五〇〇		

同社の創業は昭和四年四月二十六日であるから四年の上期は僅かに殘すところ二ケ月であり充分の營業は出來なかつたものと思ふが、五年上期には契約高は既に二百八十九萬六千圓になり、更らに一ケ年後の六年上期には四百二十六萬一千圓に達するに至つた。即ち創業滿二ケ年二ケ月にして契約高四百萬圓を遙かに突破したのである。然しこれを最高として同社の契約高は伸ひなくなつたばかりでなく七年下期までは反つて減少し、八年上期になつて漸く十二萬一千圓增の四百三萬八千圓になり、四百萬圓臺を維持することが出來た、これは同社が積極的募集方針から加入嚴選主義に轉じた顯著な反映であり、その結果は左表の如くに未收無盡掛金高の上にも如實に現れてゐる。

同社各期末現在の未收無盡掛金は左の如し(單位圓)

昭和五年上期末	一二九、〇〇二	昭和六年上期末	五一三、三三三
同六年上期末	四四九、三二五	同七年上期末	三二七、五六六
同七年下期末	二八〇、二一〇	同八年上期末	二八二、一八九

同社の未收無盡掛金は昭和六年上期に於て實に五十一萬三千圓といふ巨額になり契約高との對比率は一割二分の高率になつてゐる。これが右表に示す通り每期減少し八年上期には契約高四百三萬八千圓、未收無盡掛金二十八萬二千

圓比率六分九厘に迄低下せしむることが出來た。六分九厘といふ率は決して低率でなく全國未收無盡掛金の平均率から言つても高率に當つてゐるが、それでも一割二分からの未收無盡掛金を短期間即ち僅々三四期の中に金額にして二十三萬一千圓、これ迄に減少せしめたことは同社の努力を多とすべきである。未收無盡掛金激減の結果は同社貸借對照表の數字を著しく變更せしめた。即ち左の如し(單位圓)

資產及び負債中の重なる科目

	八年上期	七年下期	六年下期
貸付金	二五六、二一二	二五一、五二四	一三八、七四七
銀行預金	三七八、五七二	二五九、〇〇九	八六、〇〇二
未收無盡掛金	二八二、一八九	二八〇、二一〇	四四九、三二五
未拂解約返戾金	三七、三一四	四〇、三二四	一六、三四五
無盡給付資金	八三四、四四八	七〇六、三一二	六一七、四六五

特に目立つのは貸付金及び現金預ケ金である。現金預ケ金は六年下期八萬六千圓であつたものが、一ケ年後の七年下期には二十五萬九千圓になり、更らに八年上期は三十七萬八千圓、約四倍餘の著增振りである。貸付金も六年下期に較べると十一萬八千圓の增額になつて約倍額に近い增加となつてゐる。

同社の經營無盡は大阪式ではあるが、千圓無盡で未給者の掛金總計は九百圓及び九百二十四圓の兩種、給付金額との差も比較的少なく、初回に於ける掛金總計は前者千二百圓、後者千八十圓になつてゐて掛金剩餘金は前者は東京式よりも幾分多いが後者は殆んど東京式無盡同樣である。然るに同社の給付資金は非常なる膨脹をなし六年下期四十四萬九千圓であつたものが八年上期には八十三萬四千圓になり同社契約高の二割以上になつてゐる。剩餘資金及び利益金の保留額は契約高四百萬圓の同社として殊に創業日淺き今日大した額には上つてゐまいと推測されるのである。若し推測が當つてゐるとすれば滿會給付希望者の給付資金といふことになるのである。それに同社には未拂無盡給付金が每期皆無になつてゐるが、勿論同社には現に八年上期の如き三十七萬八千圓の現金預ケ金がある程であるから給付はいつでも出來るわけであるが、無盡金の給付までには少くとも十五日や二十日を調査に要するであらうし、或は一

ケ月位要することもあると見なくてはならぬ筈であるのにいつも期末の決算時迄にこれらの給付を全部完了し得るかどうかといふことである。決算の月に於ける開會日が悉く月の上旬であつて月末迄に調査完了して給付が出來るものならいざ知らず、これとても毎期といふことは餘程新團開始を月の始めのみに限つて立てるやうにして行かねば不可能のことではないかと思ふのである。

同社の營業報告に目を通してゆくうちに、或は未拂無盡給付金の性質を帶びるものも全部八十三萬四千圓の中に包含されてゐるのではなからうか。それが直接の原因ではないがさうしたことからかくの如く無盡給付資金が膨脹してゐるのではないかといふ感がしたのである。或はこれは筆者の獨斷的推測であるかも知れぬが、とに角同社の無盡給付資金が八十三萬四千圓になり、しかも未收無盡掛金が激減したので資金關係は極めて豊裕になり、寧ろ適當の投資對象物が無くて資金運用に惱みつゝある位である。更らに轉じて同社の收支關係を見ることにするが、同社の無盡利益は實に少く漸く、一萬一千圓、しかも一方に五千圓の無盡給付資金繰入れをしてゐる狀態である。同社無盡の豫定收支計算に就て調べる餘裕を今持たないので無盡利益の組入がどうなつてゐるかは不明であるが將來のためにも無盡利益の正確さを期すべきであらう。受入利息が同社最高の收益となり二萬四千圓なつてゐるが、約六十萬圓（その中三十七萬圓は銀行預金）の受入利息としては極めて好成績と言はねばならぬ。無盡利益が過度に少なく、且つ資金繰入五千圓無盡損失金五千圓が大きな負擔となつて僅かに百餘圓の當期純益金しか擧げ得なかつたが、面目を一新せる同社の將來には期分の充待が出來る。

同社八年上期の貸借對照表は左の如し。（單位圓）

資產之部

拂返未濟資本金	七五、〇〇〇	資本金	一〇〇、〇〇〇
未收無盡掛金	二八二、一八九	無盡給付資金	八三四、四四八
貸付金	二五六、二一六	未拂解約返戻金	三七、三一四
營業什器	二、二二一	未拂入札差金	二二、一八八
銀行預金	三七四、六四二	假受金	三、六八一
現金在高	二、八六八	社員身元保證積立金	一、二五六
假拂金	二、六九一	當期利益金	七四一
所有土地建物	二、七三九	（內前期繰越高）	五四六）
都便貯金	一、〇六一		
合計	九九九、六三〇	合計	九九九、六三〇

攝津無盡株式會社

～～業績は依然好調～～

大阪府十七社、其の總契約高七千七百四十萬五千圓（昭和七年下期調）の內、平均以上の契約高を有するもの七社同社も又其の一である。大大阪市形成前の所謂舊市街に營業所を持つもの十二社、其の內五百萬圓以上の契約高をもつもの六社、同社はその四位にある。舊市十二社の設立順は明治一、大正七、昭和四、然して大正時代の設立順は三年一、五年二、七年一、十一年一、十四年二、然して同社は其の十一年六月の設立、資本金十萬圓拂込濟である。同府下業者の經營は流石に概ね大阪式、たゞ僅かに和泉無盡が折衷式を併用し、大阪中央が折衷式のみを採用してゐるに過きない。同社も又純大阪式、十二年下期に八十一萬六千圓の契約高を擧げ、爾來順調に累增又累增の一路を辿つて今日に及んだ。未收無盡掛金の契約高に對する比率歩合も、曾つて六分だつたことがあつた外概ね大抵を持續し、同府未收平均四分二厘を遙かに下廻つてゐる。先づ此の點から見ても同社の業績惡からずとの見解が立つ譯である。

大正十二年以降の趨勢は左の如くである。（單位千圓）

	契約高	未收高		契約高	未收高
大正十二年下期	八一六	—	大正十四年下期	二、三二六	一三七
昭和二年上期	二、四〇五	一四五	昭和三年上期	三、一二五	一三五
同 四年上期	三、七六六	八八	同 五年上期	四、六五〇	一四三
同 六年上期	五、三七二	一六一	同 六年下期	五、六八五	一四一
同 七年下期	五、九三三	一六七	同 八年上期	五、九六六	一九〇

即ち八年上期に於ては契約高六百萬圓の域を摩し、未收歩合は三分一厘を示してゐる。同地一般の傾向として無盡給付資金は潤澤で、資金關係の惱みに煩される惧れはないが給付拒絕滿會支拂に對する、例の未濟口掛金差損の塡補に備へて、遊資運用の技術が等しく資金運用上の惱みとなつてゐる。同社八年上期の無盡給付資金は六十萬六千圓になり、契約高に對し一割以上の金額になつてゐる。未拂無盡給付金は漸減三萬七千五百圓に止まつてゐる。給付拒絕傾向の當然の現象と認められる。ただ未拂入札差金が比較的多い樣に思はれる。資金運用に付て同社は之れを貸付金

に意を用ひ、同期三十一萬二千圓の中、その九割を限度貸に振り向け不動産擔保に對しては僅に六千九百餘圓に止めたことは、極めて賢明なやり方である。而も其の收入利息は相當の好績を擧げ、六年下期には年九分三厘、七年下期には一割强の利廻りを得て居る。猶七年下期には之れを缺いたが毎期概ね未收無盡掛金の銷却にも留意し、六年下期の如きは一萬七千圓を割いて居る。無盡利益の組入には今少しく考究の餘地があるやうである。同社の現金預ケ金は二十二萬一千圓と可なり多額になつてゐるが、月割給付額から見ても今少し運用に振向くる餘地が充分に殘されてゐるやうである。同社の順調なる推移は無盡利益金漸增の上にも現はれてゐるが、然し利益金組入に際し、十分の三以上を資金に保留し置くの策に出でたならば、即ち敢て資金繰入の手數を重ねるの要もあるまいと思ふ。現在の給付狀況に於ては何等資金薄を憂ふることがないは言ふ迄もない次に同社の考課狀中特に注目を惹くことは、營業用土地建物什器の十五萬九千圓といふ額である。之れは營業所の敷地建物等であるが、同府に於ても交野無盡の二十八萬二千圓を最大とし、同社之れに次ぎ關西商工の十五萬五千圓を除く他、斯くの如き巨額を示すものを見ない。尤も此の固定資本の多額だといふことは、何等業績を妨げるといふ譯ではなく、殊に同社は若干宛の銷却をしてゐるのだから敢て咎め立てるの要はないが、無盡經營者としては多額の固定資本は成るべく早く銷却に努むる要があることを附言して置きたい。

同社利益金處分の跡を見るに、概ね其の利益金の半ば又はそれ以上を社外に放出してゐる。即ち重役賞與金はこゝ數期二千五百圓の恒例を襲ひ、株主配當は六年下期の一割二分が七年同期以降一割を据え置いてゐるが、何れにしても低金利時に高率の配當である。尤も同地方は一般的傾向として株主に厚く、且つ之れだけの業績を擧げ諸積立金も最早資本金の半ばに達せんとする狀況からすれば、必ずしも過大視するを得ないかも知れぬ。然し他の多くの金融機關及び產業興業會社等の對比上、今少しく社內留保に精進

することが更らに社業充實の資たらんと思ふのである。

同社の未收無盡掛金は前述の如く比率至つて低く、成績良好だとはいへ、兎も角十九萬圓を算し、而も其の八割五分は給付濟口未收掛金になつてゐるので、之れが回收及銷却に努力することは、同社の殘された唯一の責務であり、他面給付嚴選を以つて將來の未收防止に努むべきである。猶同社の解約口も相當の數を示し、六年下期解約手數料收入七千六百七十圓、七年同期三千四百八十圓、平均五千五百圓程度の解約は千圓會換算二百五十口に當る。之れ又加入選擇により豫防の必要があるであらう。解約は其の手數料の收入と、返戻金無利子滿期拂とにより、何等失ふ所ない樣であるが相當の募集費を犧牲にし、又事務の煩累を作り、缺口未收掛金の厄を增し、其の採るべからざることは言を俟たない所である。

以上の所說を要するに同社は契約增進に於て澁滯なく、未收掛金は比較的少なく、資金の運用上に於ても極めて留意の跡あり、多數同業者中業績佳良の部に屬するものと云ひ得られる。流石に社長中野間菊雄氏は業界鍛練の士として現に全國無盡集會所理事たる外、同地近畿無盡聯合會長の要職にも就いて居られ、業務遂行の上にもソツのある筈がない。ただ二三筆者指摘にかゝる卑見に對し、響應相打つものありとせばそれ等の諸點に一層の力を割かれ、更らに同社の健全なる成育隆昌を切望する次第である。八年上期同社貸借對照表は左の如くである。(單位圓)

資產		負債	
銀行預ケ金	二二一、七八二	未拂無盡給付金	三七、五〇〇
不動產擔保貸付	六、九一一	未拂入札差金	一三、二三七
拂込金限度貸付	一八八、六〇四	未拂解約返戻金	六一、〇五六
給付金限度貸付	一一七、二一二	無盡給付資金	六〇六、五五三
未收無盡掛金	一九〇、一六四	未經過無盡掛金	二五、三一〇
假拂金	二、八八〇	契約申込證據金	八一六
所有不動產	二九、二〇〇	假受金	三、七八八
營業用土地建物什器	一五九、〇〇〇	保證金	三、七四七
		社員積立金	二、六六〇
		資本金	一〇〇、〇〇〇
		法定積立金	四三、三〇〇
		當期利益金	三、五六五
合計	九一五、七五四	合計	九一五、七五四

大一無盡株式會社

〜社業先づ順調〜

同社は大阪市南區に所在し、資本金は拾萬圓（內拂込高五萬圓）營業區域は大阪市、堺市、岸和田市の三市と他三郡に渉つて居る。設立は大正十四年九月である。

由來大阪市の營業無盡界は東京のそれに比し甚だ振はないものがある。契約高に於ては東京の次位になつてゐるけれども其の差は格段の相違があるのである。府下所在十七社の總契約高は七千七百四十萬五千圓にして、東京府の總契約高二億九千九百六十萬三千圓に比して遙かに前途遼遠の感がある。同社は創業後比較的順調なる經過を辿つて來てゐるが、契約高增加の跡を見れば仲展極めて遲々たるものである。近時同市の業界は頓に活況を呈し、著しく伸びつゝあるので同社の如き、更らに一段の努力を以てしてこの際社業の發展充實を期すべきであらう。

同社の契約高、未收高及比率の動向を示せば次の如くである。（單位千圓）

	契約高	未收高	比率		契約高	未收高	比率
大正十四年下期	五〇	不明	—	昭和二年上期	六〇五	一七	〇・〇三八
昭和三年上期	七七五	三六	〇・〇四六	同　四年上期	一、〇〇三	四九	〇・〇四九
同　五年上期	一、〇一〇	六〇	〇・〇五九	同　六年上期	一、一四六	六六	〇・〇五七
同　六年下期	一、二六八	七五	〇・〇五九	同　七年下期	一、四八五	七九	〇・〇五三

同社は大正十四年九月に創業されたのであるから同年末には五萬圓の契約高であるが、昭和二年上期には六十萬五千圓になり、更らに四年上期には百萬圓を突破し、其の後僅少ながら逐期漸增の趨勢を示してゐるのである。未收無盡掛金は契約高の漸增に連れて增加傾向を顯著にし、七年下期は契約高百四十八萬五千圓に對し未收無盡掛金七萬九千圓、其の比率は五分三厘となつた。然し全國平均未收率より見るとまだ稍々低率になつてゐるが、決して樂觀すべきではない。

七年下期營業概況は、契約組數が六十四組、口數が千八百七十口、其の契約高は百四十八萬五千九百圓である。現金預ヶ金は六年下期の四萬圓が倍額以上になり八萬六千百

九十六圓といふ數字を示してゐるが、無盡給付資金も三十五萬七千七百餘圓になり、同社無盡の經過進行と共に給付拒絕が漸次高率になつてゐることが窺れる。未拂無盡給付資金が僅かに二千九百圓であるのに徵しても給付が迅速に行はれ、資金關係は充分の餘裕を殘してゐるが、滿會給付金に備へこの程度の現金預ヶ金の保有は必要であらう。營業用土他建物什器及所有動產不動產とに一萬六千餘圓固定してゐるが、未收無盡掛金が比較的少額にとまつてゐるので資金はよく運用されてゐる。即ち同社の貸付金は十五萬六千六百餘圓になり、その內容は不動產擔保貸付五萬三千圓、拂込限度貸付六萬八千圓、給付金限度貸付三萬五千圓で利息收入の如きも極めて好率になつてゐる。從つて同社の經營は無盡利益金よりも、寧ろ貸付金の收入利息に依つてより多く賄れてゐると言つてよい。無盡利益金は契約高の割合に少なく漸く七千三百六十四圓に過ぎないが、貸付金の利息收入は一萬一千三百三十五圓に達し、年利約一割四分に當つてゐるのである。無盡利益金よりも貸付金利息を重視するの傾向が大阪式無盡經營の會社では近時特に顯著になりつゝある感あるが、無盡本來の組織から言つて果してどうかと思ふ。この點に就ては充分考究の餘地があるやうである。七萬九千圓の未收無盡掛金の中大半は給付濟口未收であるが、每期銷却に努力してゐるので內容は良質になつてゐると見てよい。未拂入札差金の一萬圓は同社の契約高としてはいさゝか多い恨みがあるが、それは解約口が多く、それが決濟されないでゐるからではないかと思はれる。

然し同社が不良資產の淸掃に努め、當期も未收無盡掛金の銷却が八千二百餘圓に達してゐることは堅實なる經營方針と言ふべく同社將來のため欣快に耐えぬ。

結局當期利益金二千六百二圓を法定準備に五百圓、配當金（年割八分）二千圓と云ふ處分をし殘額を後期に繰越してゐるが、この際二千圓を社外配當することは少しく無理がありはしまいかと思はれる。更らに一段の奮進、社業の充實發展を遂げるやう切望してやまぬ。

浪花無盡株式會社

～近年著しく好轉～

大阪市南區順慶町所在の同社は資本金六萬圓（內拂込高一萬五千圓）營業區域は大阪府一圓、設立は大正七年十一月である。

同社は創業後永い間沈衰狀態にあつて進展を見なかつたのである。契約高は百萬圓に達した事なく、殊に未收掛金の重壓を受けて來たが、近年著しく好轉し、目覺しき社業を示してゐるのである。昭和七年下期には赤字を黑字に轉換し八年上期末には株主配當すらして居るのである。之れは偏へに同社重役が經營刷新を計り、研究的態度を以つて不斷の努力を續けて來たのが酬ひられたのであつて誠に欣快に堪へない。此の調子で經過するに於ては將來益々斯業の聲價を發揚する事疑ひない。

同社の契約高、未收高及比率の動向を示すに次の如くである。（單位千圓）

	契約高	未收高	率		契約高	未收高	率
大正十一年下期	六八五	不明	—	大正十二年下期	九八六	不明	—
同十四年下期	五四七	四一	〇、〇七五	昭和二年上期	五七七	三九	〇、〇六八
昭和三年上期	四六九	三六	〇、〇七七	同　四　上期	九三八	二三	〇、〇二三
同　五年上期	一、五四九	二四	〇、〇二五	同　六年上期	二、〇五〇	三七	〇、〇一八
同　六年下期	二、四三一	二八	〇、〇二三	同　七年下期	三、二八三	四五	〇、〇一四
同　八年上期	三、九三四	三六	〇、〇一四				

同社の契約高は大正十二年下期には百萬圓近く有してゐたのであるが其の後昭和四年頃迄は漸減した。之は創業當初の契約高が大正十三、四年頃滿期到達となり新規契約が補充されなかつた結果と見られる。即ち大正十四年には十二年下期に比して四十四萬圓も減じて期末契約高五十四萬七千圓である。更に昭和三年上期には四十六萬九千圓となり、此の當時迄は未收率は極めて高率、七分以上を示してゐた。然るに昭和四年上期より契約高及未收高も好轉して同社重役の刷新經營が成功した。昭和五年上期には契約高百萬圓を突破すること五十四萬圓、翌年同期には二百萬圓を超え、昭和七年下期末には三百萬圓を破つた。他方未收高は昭和四年上期より著しく好轉し、前年同期より六分四

を厘減じて一分三厘の低率となつた。其の後幾分の移動はるが、一分臺に喰止めてゐるのであるから、全く異常なる好績と言はねばならぬ。

以上の如く近年著しく好現象を呈して來たので此の反映は昭和八年上期末決算狀況にも現れてゐるのである。現金預ケ金勘定は前期より三萬九千圓增して十一萬四千八百餘圓になり、未拂無盡給付金は皆無になつてゐる。手許資金は綽々たる餘裕を示してゐるのである。未拂解約返戻金四萬七千圓、無盡給付資金二十一萬二千圓を有して居るが、何ら資金關係には不安がない。寧ろ現狀を以つてすれば、現金預ケ金を有ち過ぎ資金運用の點より見る時もつと有價證券なり安全なる貸付に運用すべきでないかと考へられる貸付金は十一萬百餘圓あるが前期より一萬三千圓を增し主として拂込金限度貸に增加してゐるのであるからよい現象である。即ち貸付內容は不動產擔保に三萬三千圓、給付金限度貸に一萬四千圓、拂込金限度貸に六萬一千圓であるから最も妥當な振向け方であり、利息收入も前期のそれに徵して見れば、年一割以上に廻つてゐるのであるから適當と思はれる。未收無盡掛金は五萬六千五百餘圓で契約高三百五十三萬四千圓に對して一分四厘の低率は至極結構であるが、同社には解約缺口が相當ある樣である。未拂解約返戻金四萬七千三百餘圓、前期の解約手數料八千圓に徵しても推察出來るのである。

次に損益勘定であるが八年上期はその內容不詳なる爲前期の之れに依るが無盡利益金一萬九千七百圓、無盡給付資金繰入三千五百四十五圓、差引一萬六千圓の無盡利益金となる。之れは輕少の感があり、少くとも二萬五千圓以上の無盡利益金ある筈である。同社は大阪式であるにも拘らず無盡給付資金は比較的少いのであるが、解約缺口の多き爲之れが無盡利益金を少くせしめてゐるのではないかと思ふ八年上期は當期の利益金二千九百八十七圓の內五分八厘餘を社內に留保して他を社外へ配出してゐるので手堅い處分振りを示してゐる。

切に同社將來の隆盛を待望して筆を擱く。

日本共立無盡會社

〜陣容一新に乗ぜよ〜

同社は大阪最古の經歴を持つ日本殖産無盡の設立後三年即ち大正三年十二月同府第二の無盡會社として、同區同町に設立されたのである。資本金十萬圓（全額拂込濟）大阪式、營業區域は大阪府一圓となつてゐる。大正十一年下期には既に五百四十三萬餘圓の契約を擧げ、同期日本殖産は九十萬圓臺に過ぎないといふ驚異的對照を示したが、昭和五年上期には再び日本殖産の契約が同社を超えるに至つた殊に六年上期の六百三十八萬九千圓を頂點として、爾來漸減歩調を辿り、未收無盡掛金は又同期以來上昇の徴を示すに至つた。同社は京都の帝國共立とは從來姉妹關係にあり帝國共立破綻の爲めには少からぬ影響を蒙つたことは爭はれない。それらの點が反映してゐるのは言ふ迄もない。斯くて昭和七年末の契約高は同府十七社中の第三位を占むることになつた（第一位は交野無盡）今同社大正十一年以降の契約高及未收無盡掛金の趨勢を示せば左の如くである。

（單位千圓）

	契約高	未收高		契約高	未收高
大正十一年下期	五、四三一	—	大正十二年下期	五、五二九	—
同　十四年下期	四、二六一	一九七	昭和二年上期	四、四三八	二九〇
昭和三年上期	四、七七八	一九六	同　四年上期	五、五八六	二〇六
同　五年上期	六、三〇三	二〇八	同　六年上期	六、三八九	二三五
同　六年下期	六、二九	二四八	同　七年下期	五、九六七	二八八

即ち五年上期に於ける同社契約高對未收無盡掛金の比率は、三分三厘だつたものが六年上期三分五厘・同下期四分七年下期四分八厘と逐次增加を示してゐる。八年上期の契約高は今明らかにし得ないことを遺憾とするが、未收無盡掛金は前期から約十萬圓の減額を見せてゐるから、恐らく改善の跡は顯著なるものがあると思はれる。

右の如く同社の業績は外觀的に一時停頓の狀を示したが八年五月臨時株主總會を招集して重役の改造を斷行し、爰に陣容を改めて業績向上刷新に精進することになつた。新重役は第三無盡（同區安堂寺橋通昭和六年設立資本金十萬圓二萬五千圓拂込）の取締役、監査役を擧げてゐる。從つ

て第三無盡は近く同社に合併される筈である。同社營業報告書に「時恰かも役員全部の交迭ありて春の芽生と共に一脈の生色を得て」云々と述べてゐる。自ら今後の動向をも語るものと思ふ。

八年上期（第三十七期）の同社考課狀によると無盡給付資金の四十五萬二千圓は、前期に比し四萬七千圓の減少を示してゐる。また未拂勘定も四萬一千圓を減じてゐるのは同社好轉の一端を示すものである。同社近來の契約減は從つて到達高にも及び、自然給付資金に波及するは怪しむに足らず、前期に於ても前年同期に比し實に十三萬三千圓の減少を示してゐるのである。然して同社の手許資金關係は現金預ケ金十四萬六千圓（前期より四萬圓增）有價證券四千圓、この他に貸付金が四十四萬二千圓（前期より三萬一千圓減）計上されてゐる。貸付金の中二十一萬八千圓（約五割）は不動産擔保である。（前期に比し一萬圓回收）同社は過年帝國共立が不動産貸付の爲めに破綻を早めたのに鑑み、借換以外は之れに放資しない方針を採つてゐるといひ又前期に比し一萬圓の回收もしてゐるのであるが、他方限度貸付に於ても二萬二千圓の減少を見てゐる。寧ろ前者を同收して後者に擴張する方針に出づべきであらう。同社の貸付利息收入は頗る好調を示し、六年下期二萬四千餘圓、七年同期二萬二千餘圓、八年上期二萬四千餘圓、之れを年利換算すれば約一割一分强に當つて居り、從つて貸付方面への運用を擴張することは同社の充實を計る唯一の賢策たることを疑はぬ。同社の經營無盡は大阪式掛金表に限られてゐたが、近年東京式無盡を併用してゐる爲め、給付拒絶の偏傾は大いに緩和整調されて來てゐる筈である。然し時に大阪式の滿會とかち合ふ場合には却つて資金薄を來しはしないかを案ずる。而も同社は毎期一、二萬圓程度の（六年下期二萬七千圓）資金繰入を續行してゐる。次に同社負債勘定中假受金の他に假入金五萬圓がある。之れは借入ではないのであらうか、若しさうだとすれば支拂利息の二千三百八十九圓餘（年九分五厘强）も肯ける理であり、給付資金に不足を生ずる場合があること等を想察することが出

來るのである。

同社の解約手數料は六年下期一萬圓以上を計上して張目させたが、七年同期、八年上期とも皆無になつてゐることは著しい改善である。而して解約返戻金も亦漸次減少傾向を示してゐる。

終りに同社が極力資產內容充實を期して繼續的に諸銷却を勵行してゐることは推賞すべきである。同期も未收無盡掛金銷却一萬二千餘圓、貸付金一萬四千五百餘圓、所有不動產評價損五千二百圓を計上してゐる。更らに過去を顧みても五年上期三萬圓弱、同下期二萬七千圓、六年上期一萬七千圓（以上未收及貸付金銷却）六年下期二萬五千圓、七年同期一萬一千圓、八年上期は前記の如く計二萬一千圓になつてゐる。之れは同社の誇りとも云ふべく、他日必らず酬ひらるゝ日が來るであらうと思はれる。營業用什器は前期に比し六萬二千圓を減じてゐるが、これは前營業所の關係であらうが、それにしてもあまりに金額が多いやうである。然して當期利益四千百九十六圓を擧げ、その七割三分を割き、前期同樣六分の株主配當をしてゐるのは聊か贊意を表し兼ねる。要するに同社は近年種々の事情に禍されて業績の低下を示して來たが、重役全部の交迭により爰に一脈の生色を得たるを機とし、本來の堅實方針を發揮し、資金の調整に努力を用ひ、殊に第三無盡合併と共に統制經營合理化經營の秘を竭し、業績向上を具現されんことを望んで止まない。同社八年上期の貸借對照表は左の如し。

資產		負債	
現金預ケ金	一四六、八二五	未拂無盡給付金	一三、一〇〇
有價證券	四、四三二	未拂入札差金	二七、四九八
貸付金	四四二、三六八	未拂解約返戻金	二一、一四二
未收無盡掛金	一八七、二二四	無盡給付資金	四五二、〇〇〇
所有不動產	三九、四〇六	社員身元保證金	二三、二三〇
營業用什器	二、四七九	未經過無盡掛金	一二、五一二
假拂金	一、六八三	假受金	一、二七三
借地借家敷金	一五〇	假入金	五〇、〇〇〇
		雜	二、〇二六
		株主勘定	二二一、七八六
		諸積立金	一一七、二九〇
		當期利益金	四、一九六
合計	八二四、五七〇	合計	八二四、五七〇

日本殖產無盡會社

～未收率の低下顯著～

大阪府十七社の中最も古い沿革を持つ同社は明治四十四年春陽四月、同市西區京町堀に設立された。資本金十萬圓（內拂込五萬一千圓）營業區域は南河內郡を除く大阪府一圓になつてゐる。經營無盡は大阪式、明治時代唯一の會社である。當時東京に於ても侑信、眞成、東京朝日、合資會社東京無盡の四社を數へるに過ぎなかつた。爾來大正三年十二月の日本共立無盡（同區同町）設立迄の三ケ年間は全く同社の獨占するところであつた。

同社は設立以來一進一退はあつたが大正十四年上期契約百萬圓を突破、同期末百五十二萬六千圓を計上してからは順調なる經過を辿り、六年上期には七百七十四萬七千圓を錄するに至つた。爾來幾分停頓の狀も見えたが、七年下期を一期として再び增加傾向に轉じた。何しろ同府に於ては大正年間になつて十一社を增し、昭和に入つて更らに四社の設立を見たが、同社はその第二位の契約高を保有してゐる。未收無盡の狀況も昭和三年上期の六分六厘を最高として、八年上期には三分八厘に改善し、同府平均率を下廻つてゐるばかりでなく、全國的にも好績である。數期の推移を示せば左の如くである。（單位千圓）

	契約高	未收高		契約高	未收高
大正十一年下期	九六四	—	大正十二和下期	八八三	—
同十四年下期	一、五二六	三四	昭和二年上期	二、二三八	一四七
昭和三年上期	二、四四六	一六四	同 四年上期	三、〇四四	一一七
同 五年上期	七、〇二八	二三二	同 六年上期	七、七四七	三六七
同 六年下期	七、六九八	三四八	同 七年下期	七、四八五	三一八
同 八年上期	七、六六〇	二九五			

同社は大阪式無盡の通有として相當給付拒絕が高率になつてゐるので、無盡給付資金は著しく增加を示してゐる。即ち八年上期に於ては七十七萬五千圓、契約高との比率は一割を示し、前期に比し十四萬一千圓の激增振りである。從つて之れが運用法を適當に取捌かなければ、滿會給付に際して直ちに資金に行詰る結果を生むことになる。同社の半期間に於ける給付濟高の跡を見るに六年下期に於て六十

四萬九千圓、七年同期七十一萬八千圓、八年上期五十八萬一千圓で約月割十一萬圓見當である。之れに對し現金預ケ金は毎期增加して、八年上期には三十六萬八千圓になり、貸付金よりも尙十萬圓の過剩を示してゐる。此の點は滿會給付額との關係上適當の處置を爲すは勿論であるが、まだ相當運用に向け得るものではあるまいかと思ふ。同社貸付金二十六萬圓は其の四割に當る十一萬四千圓を不動產に、他を限度貸付に振り向けて居るが、給付資金の運用としては努めて固定を避くる意味で、不動產に少く限度貸付に多くするがよい。同社貸付金利息收入を見るに六年下期一萬一千餘圓、七年同期七千九百圓と三千圓以上の減額になつてゐるが、貸付額は遙に增加してゐる所から判ずれば、相當不良債權の存在を疑はしめる。其の利廻りも七分見當に過ぎない樣であり、攝津、關西商工等に比し可なり遜色があるやうである。

未拂無盡給付金は給付拒絕當然の結果として漸減を示し八年上期三萬九千圓になり、前期に比し二萬二千圓を減じてゐる。而して同社考課狀中特に注目を惹くことは未收無盡掛金の內譯が、比較的未濟口に多いといふことである。即ち六年下期には三十四萬八千圓の未收掛金の內、未濟口二十三萬八千圓、濟口十萬九千圓、七年下期には三十一萬八千圓の內未濟口十五萬二千圓、濟口十六萬六千圓となつてゐる。大阪式無盡に缺口を生ずることは聊か矛盾の觀があるが、之れは恐らくは募集に當り其の質を選まざる結果ではなからうか、給付拒絕に加ふるに高率の缺口を生ずるが如きことは、豫定利益の上に重大なる齟齬を來すものであり、資金運用その宜しきを得ざれば等しく給付資金に支障を生ずるに至る。同社が資金頗る潤澤なるに似て、而も毎期五、六萬圓程度の資金繰入を續行し居ることは、或は此の消息を傳へるものではあるまいか。此のことは又同社の解約手數料からも推測することが出來る。即ち六年下期の同手數料は一萬五千八百餘圓、七年同期も一萬圓以上の巨額を示し、如何に其の解約率の高きかを物語つて居る。

此の解約に對しては極力補充を行はねばならぬ。掛金遞

減に對し給付拒絕の爲めに未濟口掛金の差損を負ひ、更らに缺口を抱へては腹背に敵を受くるものである。從つて同社はその內容の充實を計ると共に資金の有利確實なる運用に專念する必要がある樣に思ふ。

同社は他社が配當を繼續し居るに拘はらず、超然として後期繰越主義を一貫してゐる點は敬服に値するが、其の期利益金も又比較約少額に止まつてゐる。無盡給付資金繰入の重壓が著しく收支のバランスを窮窟にしてゐるのであるしかも支出經費の中勸誘費、集金費、給料、旅費等が比較的過大であることも看過出來ぬ。之れを七年下期の攝津、關西商工に比較するに左の如くである。(單位圓)

科目	日本殖產	攝津	關西商工
無盡利益金	九四、〇六八	九一、八一三	四二、五五二
貸付金利息	七、九八五	一八、四九九	一八、八一四
勸誘費	一五、六一〇	一三、〇五四	一二、七二一
集金費	八、六四四	六、八四九	一、五三五
給料	一六、九八三	一三、八二五	一四、二八二
旅費	二、一五〇	二六五	一、八五二

比較二社は同社に比し約契約高に於て百十餘萬圓の下位にあるも、契約の進度、未收步合等何れも同社を凌ぐの概あり、且つ其の利息收入に於て遙かに優位を示し、其の期利益金も一萬圓以上を擧げ、攝津は年一割、關西商工年八分の株主配當をしてゐるのである。筆者は切に同社の此の方面(經費及運用)に力を用ひ、解約の防止從つて契約內容の充實に善處され、更らに一段の進展を遂げられるやう切望する。

同社四十一期の貸借對照表は左の如くである。(單位圓)

資產		負債	
現金	二五、二九四	未拂無盡給付金	三九、〇〇〇
銀行預金	三三一、一五四	未拂先札差金	三五、七三〇
郵便貯金	一一、七〇七	未拂解約返戾金	七七五、一一五
不動產擔保貸付	一一四、九〇〇	假受金	一、七六五
拂込限度貸付	八三、三六八	未經過無盡掛金	八、一四五
給付金限度貸付	六一、九三五	信認會	三、七四八
未收無盡掛金	二九五、四九七	假收金	二、一四二
假拂金	四、一八四	入札差金配當準備金	二六五
預ケ敷金	四五〇	資本金	一〇〇、〇〇〇
未經過募集費	二七、二〇〇	法定準備金	一一、五七〇
營業用土地建物什器	五一、七三三	當期利益金	二、二三六
拂込未濟資本金	四九、〇〇〇	同前期繰越金	二、二〇四
合計	一、〇五六、四二四	合計	一、〇五六、四二四

卷末記

無盡之研究社を創業して滿五周年を迎ふるに至つた。五年の星霜決して長しとはしないがそれでも人生定命の一割に當る。しかもこの間わが營業無盡界にも相當の變遷があつた。營業無盡勃興の機運に乘じて目覺しく躍進をつゞけて來た膨脹時代から漸く整理時代に入つたかの觀があるのである。勿論それには經濟界の深刻なる不況不振の打擊に依る影響が依因するところも大きいが、營業無盡の現組織に猶幾多の缺陷が有してゐることも看過することが出來ぬ。然も無盡經營に當り、全く無信念、無方針であり、時潮と共に向上し、發展する爲めの研究心が缺如して、適應の對策を持たなかつたことが今日の衰運に導いてゐるのである。過去に於けるが如き惰性以外何ものも無き姑息な彌縫策を以てしては到底今日の複雜な經濟社會に於て落伍者たらざるべからざるは明瞭のことである。幾度も言を酸くして繰り返すやうだが、無盡經營の近代化、即ち合理化の研究に徹し、且つ精密周到なる準備と不撓不折の勇猛心が必要である、無盡の機構は決して崩壞するものでなく、經營者に人を得るに於てはわが營業無盡界の將來は洋々たるものがある。この度『全國無盡會社業績大鑑』執筆に當り、全國各社の業績を仔細に檢討して見ていよ〳〵その感を深くしたのである。榮枯盛衰の跡を辿れば例外としてそこに

人爲の及ばざるもの稀にありと雖も、自ら榮枯その一つを撰び、盛衰また然りである。

茲に創業滿五周年を迎へ、この記念を久遠に印する爲めに、この書『全國無盡會社業績大鑑』を業界に送り得たるは著者の最も欣快に耐えぬところである。本書『上卷』は北海道から大阪府にわたり、百七十一社の創業より今日に至る營業經過、最近の實際業績に就て仔細に檢討し、公平無私、飽迄も嚴正の態度を持したつもりである。著者が本書の刊行を思ひ立つた動機は惠まれざる大衆金融のため、わが營業無盡が健全なる發展を遂げ金融の重責をよく果すやう誠心希望してやまぬ勃々たる熱意が稿を起さざるを得なくしたのである。從つて著者の眞意は業界の革正と發展を望む以外何ものもないと言つてよい。相當深刻に省察を喚起してゐる點もあるであらうが、良藥は口に苦しといはれる。それは著者の赤心奔騰の結果であり、抑制し切れぬ指導精神の發露であるから、善意に聽取されて注意を喚起した諸點につき省察されるやう希望する。

經營は人にあり、然り如何なる制度を以てしても正しき認識を缺ぎ、適應の處置と運用の妙を體得することが出來なければ、結局猫に小判の類ひである。全國業界の實際に就て調べるとき、噫、人にありと長嘆されたことまた幾干であつたらうか。

實を言へば無盡會社の考課狀ほど理解に苦しむものは稀れである。即ち無盡簿記の不備が最大の缺陷になつてゐるが、考課狀面の數字に依つては眞の資產、負債の關係は全然判明しないのである。從つて營業の傾向を知る程度に過ぎない。しかも各社各樣同じ

勘定科目にしても、會社によつて處理方法を異にしてゐるので一層厄介である。或は的を外れた點も多々あるであらうが、著者の誠心に免じてその點は御寬恕を乞ふ。

無盡業界に於て全國無盡集會所編纂の『全國無盡會社要覽』以外には各社の實際業績を知るべき何ものもない。本書の刊行は單に全國各社の個々につき業績の實際傾向を知ることが出來るばかりでなく、その嚴正批判と細述せる興亡盛衰の跡を辿れば、自からその依因が明瞭になり、無盡經營上最もその熱望に副ふ好資料たるを疑はぬのである。

幸にして筆者の努力が業界の革新向上に資するところありとせば望外の光榮である。

昭和九年三月

著者識

全國無盡會社業績大鑑

（上卷）

定價七圓五十錢

複製不許

昭和九年三月十二日刷印
昭和九年三月十三日行發

329

著作兼發行人　茂川中
東京市世田谷區北澤五ノ八一二

整版人　鈴木輝喜
東京市神田區錦町二ノ三

印刷人　小宮山清五郎
東京市小石川區柳町二九

發行所　無盡之研究社
東京市世田谷區北澤五ノ八一二
振替東京八一三三五番

649
205